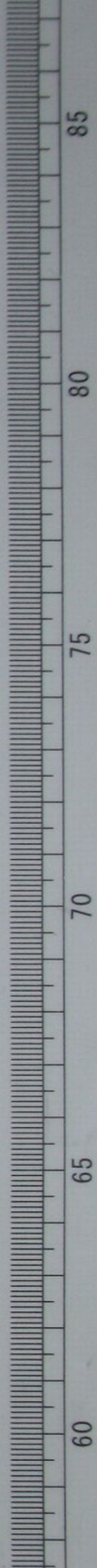


新譯四絃秋

稿本

特別  
イ4  
3152  
38





新得回紇秋題詞



舞榭歌場歲月悠。青春情事費身投。人生榮悴傷心  
 極。綺夢醒來忽白頭。  
 年年趨利向天涯。真個狂夫不憶家。鳳枕鴛鴦孤負  
 慣。空江明月倚蘆花。  
 江上琵琶一曲歌。夜船燈火奈愁何。後年賦到楊枝  
 別。輸與青衫淚最多。  
 薄倖官遷論或徘徊。名妓收場一掃哀。總被回紇彈破  
 畫。兩般秋思大將來。

敘説

六十餘年の至望を待小の乾隆の一代は清朝  
 隆運の最高位なり。而してこの後半の隆運は東  
 洋の三家の隆運の時と同じくし、徳を以て徳を  
 五つて、この隆運を多しり。三家の所長同じく  
 不と能く、氣節文章、百代に朗映ちるんまりて  
 は、此將藏園を推す、いふべきなり。  
 此將士能く、字作心銘、一字におの生情空を流す。  
 此の先は銘紙あり、此江表典より、世中の銘

詞

詞

丹心憂國暗悲傷、白傳深衷未可狂。三有追歡如湯  
 子馬前、後父荒唐。  
 青衫記法、共庸考故云。  
 林碧初人天、偶拈  
 壬子仲春





持やい。待古文詞海の内の盛名を真由  
 の最も長に撞りつるは詩人如くは有り古  
 待作近體の勝り七言尤も勝り。若若若若  
 して妙書を主とす。其の妙書は、  
 思ふに、鈴り、その妙書は、  
 味年二十、その妙書は、  
 ひ相傳つて、その妙書は、  
 七者、その妙書は、  
 三十卷、其の妙書は、  
 紅雪樓九種曲あり。

三 あり長子 知康字の 修隅 拙意の由に  
 臨清州の署せり。同トく、  
 遇い、  
 少知、  
 其疾、  
 蓋一、  
 其子、  
 其ら、  
 其の家、

紅雪樓

6.

同情はやかん 蘭曲 歌 綴 三 白 生 子の  
 使 たり 忠 臣 子 女 夢 野 の 面 目 さ  
 其 かり 道 くら 将 け 出 せ ち たり  
 三 類 の あり 山 宿 作 の あり 七 十 九  
 この ま と する ところ なる 終 事 の 待 盡 是  
 以 一 都 有 能 の 也 也 素 越 下 雲 の ぬ  
 同 代 の 群 作 家 と 肥 肥 一 獨 り 甚 故  
 権 へ せ 了 矣 宋 元 雷 力 三 三 杜 陵 の 待 史 人  
 以 一 一 序 事 諸 作 班 馬 の 才 三 三 杜 陵 の  
 去 三 行 の 沈 鬱 妙 拙 處 化 錯 綜 傑 有 力 あり

藏園の素越二家と社鼓相見え一に詩  
 に格としこ木以長の存するところあり  
 この詩二家ん地こ名をいしこ同いおあ  
 蔵園の人のせう情に深く美に常玉はこ  
 尋常 詞賦の客 録 日 雲 裁 月 の 閑 筆 也  
 字 お を 屠 せ ち ず 其 の 詩 黃 山 谷 七 宗 也  
 大も七古の妙 一 かの 詩 才 は 史 眼 を 奪 ぬ の  
 七 文 字 を 借 り 一 末 俗 の 烟 蒂 を 扶 持 せ ぬ  
 と 筋 の 粘 神 本 領 自 己 磨 滅 せ ぬ あり あり  
 忠 孝 節 義 に 格 三 六 び 其 意 を 致 一 片 の  
 好 三 山 也

十ノ廿 松辰製



個の

の心胸の闊拓し一々の豪傑を推劬するは足  
かりん。古くはの名優おのふ先づはつて  
人自ら括を知らずともあり。蔵園の教  
事。諸君は後々三三見のらるる。蔵園  
蔵此の旨と功ん。の用を。陳政の城あり  
二蔵園詩集の。後々題一といふ  
考代。後詩品。青宮の流。初。繼。皆。雅。飲。雅。是。即  
春林。栗。府。新。行。在。龍。門。史。筆。道。何。須。技  
章句。三。平。若。辨。曹。劉。  
青宮居士と推稱して九鼎大呂のしをまをる

格

先ありの色あり。一。一。の。三。括。奇。氣。不。磨。滅  
一。の。可。可。好。ん。侍。り。存。ある。の。もの。あ。る。如。し  
と。い。い。し。の。必。か。し。の。過。儀。ん。非。ず。布。し  
品。の。特。異。と。し。ん。あ。る。は。の。路。を。擇。ふ。必。か。し  
一。一。の。限。ら。ず。侍。詞。案。府。の。道。を。と。こ。る。ん  
経。る。と。五。三。選。り。長。短。錯。在。揮。灑。眩。横。た  
し。ん。存。り。王。述。菴。回。く。存。莽。者。者。を。し  
故。考。と。し。ま。か。ず。正。い。昆。陽。の。取。戦。雷。の。雨  
交。も。臣。作。の。あ。め。り。河。庭。の。君。信。以。以。爲。古  
と。今。海。立。ち。西。を。出。る。も。あ。め。し

十ノ廿 松屋製

さういふ若藤十子か、道清の首を思はるれ  
とも親しく甚果を賣るあはれはあつた  
阿好の語りも、さういふ事あることあるし  
嗟乎亦久至止のあり  
次は相伝の事なりんは激越悲壯、或は難卒  
に接せしむる事あり、その又、は明快暢  
達なせん、侍りし、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍  
の侍と相待りて、其名を石杉の侍

諸作

十ノ廿 松屋製

洞人たる彼の面目は愈よ此間を揮ふ  
たるを見んし

蔵園作との間の侍者丸丸

蔵園作との間の侍者丸丸、昔祖極堂  
谷者、一片石加二碑、臨川夢雪中人、名青樹  
曰候、坊えなかり、うへに合せん、紅雪樹丸極曲  
つ、~~その~~材を運送する大  
指、前古の事、身し、本つを、雪中人の、録、馬侍  
、~~あり~~、~~片~~石加二碑の、事、始、を、録、  
名青樹の、宋末、殉節の、諸忠臣、を、録、  
桂

林雨の鳥又教を教し、空谷者の南宮令尹  
 の管轄を新し、香祖核の三と相表裏し、  
 位格の白氏、聖行より出せし、かみさひ  
 たるやし、待たれし、寂事を主とし、孝存節美の  
 格を三たび其意を教せし、藏国は、侍者あり、  
 ともあふむものあり、その政曲、按察の才を、  
 かつ、性景、兼ね用い、そのあ、待たれし、  
 い、新し、ん、ん、天上天下、森羅萬物、  
 い、園を、紀事は、白と陰との外、  
 ん、印、の、深、裏、の、  
 結、  
 結、

細心神面、空谷者の題、  
 甲戌、乞假、還、美、舟、子、然、行、廻、  
 飛、の、旋、状、疏、檀、田、開、一、指、白、  
 啓、揚、聲、容、清、の、空、谷、香、侍、奇、  
 有、所、得、即、秋、際、光、中、  
 身、若、有、沙、漫、者、回、視、自、舟、之、  
 唯、上、江、  
 空、谷、  
 結、

予は此の九種曲を細評するの暇は人休  
 前の評一條を抄し未だ評す  
 个抄の評自評ありと云ふ能く便か  
 果は梅の曲評に云く将心録太史の九種  
 曲は海清始自是以待力の本色并に終  
 氣を使ふを以て能く云ふ故に此の至  
 年の作者亦云は云の高なる也  
 せん能く云ふ也との臨山夢の如きは  
 中々其の著士先生云く自夢境に入  
 ると曰夢中の人也一初見するは君を請

北

三返露や一ものいひは  
 蔵園の侍青の松は疎林の筆墨  
 三返露や一ものいひは疎林の筆墨  
 曲書せり而して三返露の起る  
 ば怪腐る編の新曲を撰む其帰を  
 回しらするの喜劇の樂の夫  
 又先即吾の言をいふの樂の夫  
 の国より相の言をいふの樂の夫  
 之等は其雅の麗に云く此の相持る  
 冷も好ら相持るの麗に云く此の相持る

回時  
下

うれし涙及びり。想ひ非非り。喉喉なる清き言  
 猶ほ懐持り。桂林霜の一片石。非二碑あり。  
 青洲の四圍。皆名教の功あり。言志碑あり。  
 碑あり。腕中あり。尚民報。龍女。生気  
 氣。徳す。受り。善祖。快宣。心。昔は。同甲  
 柄。て。異。を。見。る。最。も。年。三。下。は。能。く。盡。し  
 夢。蘭。の。海。蘭。の。香。気。女。たり。深。慮。を。考。問。し  
 皆。婦。父。たり。宋。の。子。と。唐。将。軍。の。皆。禁。り。詠  
 たり。心。結。る。音。響。を。告。令。紹。たり。成。君。裝。院  
 皆。故。人。たり。具。一。少。婦。皆。秀。命。たり。と。大。

婦皆懐持り。信筆より出たり。山小江香同  
 と。東。小。能。く。乃。と。雨。劇。を。在。せ。観。の。心。推。下  
 重。積。を。犯。す。わ。の。み。は。か。目。の。各。を。錯  
 結。意。化。の。妙。を。推。して。お。ん。神。技。を。揮。す。回  
 位。柱。は。青。衫。記。の。隨。つ。因。り。待。ん。新。編。を。創  
 一。懐。持。筆。を。成。し。宣。也。さ。加。へ。ず。成。ん。心。を  
 青。詞。博。切。言。へ。人。を。感。せ。ら。ん。と。言。ふ。成。ん。心。を  
 後。者。を。江。州。司。馬。の。浪。青。衫。を。還。す。お。め。り  
 たり。山。雲。中。の。一。割。吳。の。奇。を。考。し。松。上  
 い。説。を。考。す。柳。柳。を。考。し。世。を。い。と。欲。す。夜。交

試ん三三細評ヤ西一編の榮別は既  
 行中、あの高帯が自述の詞也、州前冷石  
 島林、若大、家伝商人、商人、利利別離  
 前後、月は果、思、志、の、向、句、三、及、て、根、據、ん  
 じし、依、者、の、想、像、を、運、ら、し、別、離、の  
 情、景、を、把、り、空、い、あ、る、繪、を、出、し、た、る、の、  
 な、い、は、る、婦、女、の、婉、轉、幽、微、綿、綿、結、語、其、  
 一、一、詞、に、一、一、層、層、と、あ、る、を、賞、さ、す、首  
 尾、又、つ、向、人、の、榮、落、を、出、す、果、然、世、如、何、れ、無  
 情、也、の、伴、侶、の、残、り、は、誰、れ、は、遠、人、其、真、也、

の、此、を、以、て、結、末、一、因、却、更、い、正、心、靈、活、也、  
 此、の、  
 四位、秋、の、一、節、は、九、種、曲、中、に、在、る、最、も、簡  
 潔、な、り、と、わ、か、る、回、節、の、妙、を、  
 劇、と、稱、す、小、さ、な、この、意、元、の、此、曲、と、下、書、有、  
 り、この、劇、を、い、い、白、紙、の、裏、に、行、上、り、出、て、関、  
 房、婉、轉、の、致、を、客、中、轉、旅、の、思、描、筆、鏗、刻、  
 して、一、この、妙、を、用、盡、し、待、い、受、領、す、べ  
 き、を、賞、さ、す、  
 待、い、受、領、す、べ  
 十、廿、廿、松、屋、製

舞々々 万屋に何事か （紅） せん、その四人は皆物事あり  
 この問答は借りと全篇の細く投ぐ、その中  
 休進。物揃下妻。子輝。信懸。道安。頭懸。全  
 ころつた。住。浮。存。の。高。人。重。た。利。と。越。う。こ。南。此  
 定。路。も。く。妻。の。思。愛。を。飲。け。と。も。明。此  
 一。留。年。志。の。在。り。と。も。暗。明。子。前。け。こ  
 書。や。り。 （紅） 用。筆。

或は其美あり、此 （紅） 摺定やう。蓋一失  
 名世は無名世の音通。花退紅は名老の佳入  
 小を花の密の心は紅色将公。裡也。あ。と。ま。の。の  
 せ。あ。あ。り。あ。つ。く。鳥。子。屋。の。鳥。有。子。屋。の。美  
 だ。こ。こ。所。を。待。た。れ。と。明。あ。り。 （紅）  
 花退紅。三。易。す。備。歌。徹。尾。是。小。指。痴。笑。名。世。こ  
 罵。す。徹。頭。徹。尾。是。小。指。依。の。一。言。一。行。一。考  
 一。言。の。徹。と。許。も。あ。ん。一。言。の。徹。は。依。の。基。一  
 一。言。を。徹。は。さ。は。は。り。 （紅） 花退急。出。場。の。詞。い  
 兩陣取。場。盡。抽。捨。着。の。衫。裾。昔。清。蘭。麝。の。家。了

個多財場富積命。便做道恩爱差些休  
得取恩離別。

開口三句。長安路。後身。是。拈寫。  
| 聲聲。思愛。離。不。可。

吳不世。枯。在。時。是。病。生。也。可。不。可。  
| 白。引。是。

命。注。定。單。影。子。但。骨。肉。團。圓。便。了。耶。  
爽。快。然。你。無。家。別。可。

十之廿 松屋製

12

空靈の想 依 寄 有 何 處 有 可

持 弄 之 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙  
| 是 自 喜 自 然 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙  
か り 心 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙 妙

深 感 你 把 相 思 降 殺 這 纔 是 美 夫 妻 若 癡  
熱 者 一 看 可 認 楊 柳 把 郎 度 想 一 想 我 本  
將 心 把 明 月 難 道 是 露 水 緣 若 柳 邪。

と 子 母 子 天 下 有 花 の 女 子 あ ち ち 之 妙 妙 妙 妙  
身 子 母 子 天 下 有 花 の 女 子 あ ち ち 之 妙 妙 妙 妙



異名廿八鉄別のわんせ思心のらんたの一個の都俗  
 漢のしの生協の詩に喜續銅崖龍不受  
 玉漢家のしの十字のわん之を盡す  
 首負伊風枕智念鉄閑我銅山金穴  
 寺の句聲階口鉄財三離十すの妻の思言  
 とおの旅行の念をおうたは本名の号兒も本  
 ち花のわん多くの理命ん一つりのま下  
 封酒真密嗟做水鳥雙栖傍蓮南東  
 情を餘すらし他せらしの一つりのま下  
 十一廿 松屋製

把者支一片壹了還時  
 といふこの念之の本色は明媚の書先の封  
 ちの到底示三掩ふこの結はす精能の文字の  
 考らしこ極端の文字とせるの用筆の如政人の言説  
 すんからすまの概り  
 鳥子屋の希り訪ふあらん名世を羨はしかる  
 たりしあらまの相見るや容易んは事い後を到ら  
 の花還紅が味弟のあらん問の一事を以て之  
 問隔し別ん一種味淡き悲哀の文字を結  
 撰上之の濃艶瘵賦の氣の目を洗す又ん

ハ

其化より使開る。就中、  
待指旗風切捲。其待磨刀臨水唱。也。是。做  
一世人士。戰場。足後。横野。

便做到。青。央宮。將軍。能。奏。捷。輪。子。列。小。兒。磨。  
凌。煙。園。寫。

と。子。も。め。る。不。也。悲。壯。三。柱。め。たり。この。段。の。文字。  
は。柴。天。の。本。侍。系。走。健。軍。阿。瑤。死。著。去。朝。来。  
顔。色。故。し。の。二。張。り。柴。皇。宮。出。た。る。も。の。り。ん。  
作。第。の。胸。中。餘。裕。の。縁。と。た。る。見。ら。ん。是。る。

物々  
々々

16. 窓

花。退。紅。媛。弟。の。不。退。三。悲。れ。氣。怨。維。徊。正。の。開。文。  
遠。き。き。い。降。一。鳥。子。塵。が。嬌。子。不。栗。笑。謀。  
我。側。款。正。經。語。一。句。を。以。て。軒。上。に。掉。替。し。直。  
い。ぬ。め。り。何。卒。の。泣。手。故。の。米。名。世。一。系。の。鳥。み。  
屋。の。殆。祝。を。う。り。や。忽。ち。倉。倉。の。本。色。を。  
有。揮。し。前。に。其。妻。い。き。こ。出。所。の。念。を。止。め。ら。ん。  
宣。言。を。抽。この。古。来。の。靴。あ。る。ん。眼。前。の。  
利。を。見。ぬ。乃。て。之。を。還。し。花。退。紅。が。下。方。網。燈。春。  
真。の。態。を。あ。り。と。せ。し。故。に。能。み。ず。着。ん。袖。春。  
と。掃。く。と。遠。く。去。る。嗚。呼。人。心。の。信。が。又。た。た。る。

大初ありのあきのみ。改い未始若夢の口改て借  
て依る生意の在りしをてて多し。得て現身  
説法にや即ち是れ也。  
体留帯。体拉扯。体鏡生。可不道。從來里制  
輕別離。

又  
屋多便。是時節。保育器。在消長。規  
天下無。改の徳。ふら其のやけり。年々  
方今。改季の也。誰か果し。て真の情。受て新  
まらぬ。改は。吾好別。て作るもの。はか  
立

十十松屋製

さうじをひらきま。

子の鞠。真念。長過之。写すも。新えて。其。層。足  
けの。さ。の。地。中。長。色。の。お。は。本。扇。の。大。圓。圓  
たる。傳。陽。送。別。の。大。圓。圓。たる。と。は。三  
し。始。ら。る。勢。方。さ。音。の。改。て。後。文。の。此。を。依。り。の  
の。知。る。を。要。す。長。過。は。是。小。全。何。の。主。眼。茶  
は。是。小。本。鞠。の。主。眼。カ。も。さ。ん。於。て。案。も。也  
す。ん。い。考。の。後。に。花。退。紅。茶。ん。案。の。改。て。之。を。改  
お。の。終。ち。了。回。す

眼探茶人指針者芽。把一樓茶煙以折。

眼探茶

把把把

待要<sup>待待</sup>人湯吻熱<sup>待待</sup>轉去<sup>待待</sup>お自<sup>待待</sup>生西<sup>待待</sup>破<sup>待待</sup>  
 向向是<sup>待待</sup>小<sup>待待</sup>茶<sup>待待</sup>言<sup>待待</sup>言<sup>待待</sup>是<sup>待待</sup>小<sup>待待</sup>知<sup>待待</sup>別<sup>待待</sup>張<sup>待待</sup>意<sup>待待</sup>雙<sup>待待</sup>神<sup>待待</sup>  
 枝<sup>待待</sup>也<sup>待待</sup>

二<sup>待待</sup>物<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>改<sup>待待</sup>官<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>藏<sup>待待</sup>園<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>自<sup>待待</sup>序<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>振<sup>待待</sup>日<sup>待待</sup>長<sup>待待</sup>  
 皇<sup>待待</sup>行<sup>待待</sup>中<sup>待待</sup>白<sup>待待</sup>案<sup>待待</sup>天<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>自<sup>待待</sup>述<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>初<sup>待待</sup>也<sup>待待</sup>我<sup>待待</sup>信<sup>待待</sup>幸<sup>待待</sup>年<sup>待待</sup>章<sup>待待</sup>  
 京<sup>待待</sup>清<sup>待待</sup>后<sup>待待</sup>恩<sup>待待</sup>后<sup>待待</sup>陽<sup>待待</sup>威<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>二<sup>待待</sup>句<sup>待待</sup>本<sup>待待</sup>字<sup>待待</sup>  
 子<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>遷<sup>待待</sup>論<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>次<sup>待待</sup>知<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>寫<sup>待待</sup>し<sup>待待</sup>藏<sup>待待</sup>園<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>自<sup>待待</sup>序<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>  
 振<sup>待待</sup>據<sup>待待</sup>小<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>唐<sup>待待</sup>書<sup>待待</sup>中<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>元<sup>待待</sup>和<sup>待待</sup>九<sup>待待</sup>十<sup>待待</sup>西<sup>待待</sup>年<sup>待待</sup>間<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>時<sup>待待</sup>  
 政<sup>待待</sup>と<sup>待待</sup>青<sup>待待</sup>山<sup>待待</sup>が<sup>待待</sup>年<sup>待待</sup>語<sup>待待</sup>自<sup>待待</sup>序<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>難<sup>待待</sup>引<sup>待待</sup>し<sup>待待</sup>排<sup>待待</sup>  
 祖<sup>待待</sup>章<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>成<sup>待待</sup>す<sup>待待</sup>と<sup>待待</sup>ら<sup>待待</sup>り<sup>待待</sup>本<sup>待待</sup>論<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>首<sup>待待</sup>段<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>存<sup>待待</sup>存<sup>待待</sup>濟<sup>待待</sup>

十ノ廿 松屋製

院<sup>待待</sup>子<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>口<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>三<sup>待待</sup>傳<sup>待待</sup>ん<sup>待待</sup>述<sup>待待</sup>お<sup>待待</sup>し<sup>待待</sup>と<sup>待待</sup>ら<sup>待待</sup>り<sup>待待</sup>也<sup>待待</sup>  
 の<sup>待待</sup>者<sup>待待</sup>時<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>書<sup>待待</sup>録<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>〜<sup>待待</sup>案<sup>待待</sup>天<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>罪<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>遣<sup>待待</sup>て<sup>待待</sup>家<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>原<sup>待待</sup>  
 因<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>唐<sup>待待</sup>書<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>本<sup>待待</sup>文<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>其<sup>待待</sup>儘<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>出<sup>待待</sup>せ<sup>待待</sup>り<sup>待待</sup>す<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>は<sup>待待</sup>  
 文<sup>待待</sup>院<sup>待待</sup>自<sup>待待</sup>ら<sup>待待</sup>古<sup>待待</sup>雅<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>〜<sup>待待</sup>前<sup>待待</sup>論<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>案<sup>待待</sup>未<sup>待待</sup>部<sup>待待</sup>調<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>考<sup>待待</sup>ふる<sup>待待</sup>も<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>  
 と<sup>待待</sup>相<sup>待待</sup>対<sup>待待</sup>峙<sup>待待</sup>せ<sup>待待</sup>り<sup>待待</sup>院<sup>待待</sup>子<sup>待待</sup>が<sup>待待</sup>出<sup>待待</sup>場<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>待<sup>待待</sup>ん<sup>待待</sup>  
 臺<sup>待待</sup>陳<sup>待待</sup>世<sup>待待</sup>藏<sup>待待</sup>也<sup>待待</sup>宮<sup>待待</sup>坊<sup>待待</sup>強<sup>待待</sup>出<sup>待待</sup>説<sup>待待</sup>才<sup>待待</sup>高<sup>待待</sup>官<sup>待待</sup>不<sup>待待</sup>利<sup>待待</sup>隔<sup>待待</sup>庭<sup>待待</sup>者<sup>待待</sup>江<sup>待待</sup>州<sup>待待</sup>  
 僅<sup>待待</sup>々<sup>待待</sup>三<sup>待待</sup>字<sup>待待</sup>案<sup>待待</sup>天<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>遷<sup>待待</sup>論<sup>待待</sup>の<sup>待待</sup>事<sup>待待</sup>由<sup>待待</sup>を<sup>待待</sup>隠<sup>待待</sup>持<sup>待待</sup>す<sup>待待</sup>何<sup>待待</sup>等<sup>待待</sup>  
 の<sup>待待</sup>前<sup>待待</sup>切<sup>待待</sup>也<sup>待待</sup>次<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>その<sup>待待</sup>白<sup>待待</sup>中<sup>待待</sup>に<sup>待待</sup>請<sup>待待</sup>  
 不<sup>待待</sup>料<sup>待待</sup>悩<sup>待待</sup>了<sup>待待</sup>書<sup>待待</sup>世<sup>待待</sup>之<sup>待待</sup>張<sup>待待</sup>案<sup>待待</sup>論<sup>待待</sup>兩<sup>待待</sup>位<sup>待待</sup>宰<sup>待待</sup>相<sup>待待</sup>説<sup>待待</sup>道<sup>待待</sup>御<sup>待待</sup>  
 史<sup>待待</sup>亦<sup>待待</sup>言<sup>待待</sup>坊<sup>待待</sup>官<sup>待待</sup>多<sup>待待</sup>事<sup>待待</sup>甚<sup>待待</sup>局<sup>待待</sup>可<sup>待待</sup>悪<sup>待待</sup>孰<sup>待待</sup>中<sup>待待</sup>有<sup>待待</sup>人<sup>待待</sup>平<sup>待待</sup>日<sup>待待</sup>

真白翁不念的、兼横卷、効説、白翁の母親  
 因者、~~兼横卷~~并、而、死、白翁、反、作、意、花、新、井  
 二、考、大、男、不、存、疑、江、州、刺、史、字、目、士、王、准、志  
 宗、又、説、他、似、犯、性、重、不、腐、理、都、改、院、司、局  
 之、職  
 柴、天、如、羅、華、之、三、層、の、區別、一、改、道、説、又、説、の  
 必、虚、字、之、以、提、撥、也、眉、目、并、且、下、之、文、亦、少  
 可、变、之、簡、淨、の、如、華、之、人、多、有、此、心、柴、天、於、揚  
 の、由  
 依、依、の、下、銅、樓、結、風、閣、載、瞻、睡、詩、本、半、角、書  
 畫

十之廿松屋製

丹心、愛、關、之、詩、人、蕭、皇、了、了、關、之、考、の、状、之、浩  
 寫、一、毫、毫、の、遺、憾、也、し、心、以、次、公  
 你、看、南、山、拱、背、渭、水、彎、環、皆、有、留、金、之、意  
 又  
 今日、海、眼、秋、光、身、為、遷、客、不、覺、行、年、早、而、難、矣  
 一、讀、博、雅、の、の、心、時、腕、の、以、可、形、子、是、不、文  
 字、是、不、濟、候、并、来、小  
 者、風、出、其、石、何、處、家、上、林、造、已、搭、宮、稱  
 と、い、ふ、是、は、鉄、石、の、心、腸、亦、お、り、也、鑄、鑄、し、  
 鏡、指、の、柔、く、し、り、  
 西、行、野、侯、眼、造、の、下、を、覚、え、さ、る、が、り、

多  
 鏡指

十のい段よのいと情くそ樂天が罪を獲たる  
 原因を述べて次に藤存謙の登場ありそのは  
 借しん 未だの家の軒城をたす由縁を説く彼此  
 互味のあつた存謙が樂天の旅況を想像するの句  
 想ひよき蕭然と清濁は此車寒路同時  
 前段の照席して母風狂無限樂天が運使天  
 子中居問はせんと群居皆之を陪して甘心せむ  
 この是十九の節取てくもの  
 宣華 白日 落葉牙 守天門 守持堪怕  
 習ひ 成旅 社鼠の歎 けり 句 皆直捷なりと評

十の廿 松屋製

拔  
 藤存謙追越して樂天と相見え悠々い別を  
 の結する古喧言技人とし感服ありあとの  
 此言樂天の移りて獨りあるが下を以て續  
 出の亦え此感ちるの由をたすその是楊の曲  
 店門前半 樹垂楊直 役一句節亭話  
 情景 雙関 畫圖の多はす 春の大神の化の筆  
 たり 此情 柳倚 また 江州の山水を後す  
 有 志 志 高 寒 雙 姑 法 雁 け 無 月 意 無 價  
 と 高 句 妙 也

存濟の別小あをを及長将ニ邊ニ録押  
 一ん珍場し、問はり借りん由樂天の功ニ稱し  
 この罪なきん眩隔せらるる情お作者一段の  
 構思持ん之を詠ひ樂天予ニ道懐甘かしの  
 坐すの直東月子中居之を問はり士庶子の思  
 誠を知るは唯を群ゆい息す小ニ斬切らふ  
 あり而して樂天は自ら自を彈し存  
 不能禁陳草。罪當加惜不新納。  
 としその深醇敦厚の意愈よの其極見す人  
 作者乃其彼の深衷を新納し正に彼は神也

樂天

樂天予の侍候が道まき指を賣したる。此の  
 世へ翻つて存濟が國敵の世のめん深く危  
 むと云ふありそのありしを物かむと新其まの  
 故に字に痛徳語悲憤。この事  
 報果直得死何怨怖報恩無可故庶須四能  
 とら。一死君の報も。かこら可なり。樂天も亦今  
 の世の群人朝に當り報恩の志を盡す人  
 道也といひ流歎の行そし死を望み。結死  
 亦ん何の益あらず。あむ腕曲るる味あり。此  
 このま酒酔の凄切。嗟予時事知んまのぬ。

新

存

さよふれ

第之物の秋夢は 琵琶行中「夜深多夢少年  
事夢啼粧淚紅闌干」の句本つを 花紅紅  
の句の表の竹を写す。この表句

空照自守。別根年年長若寒江似酒將人醉

過深枯  
しん

智火過眼。此氣康人。迴憶少年情事。此生教人迷

問也何。連想狂心。隨ふらと宿す。雨の花浪紅

か自述の詞 西江月の一関

昔任暇嘉陵下。居舟中。白夢必燕。西

東。極了。沈。粉。粉。粉。洗却。刺。暗。零。粉。林。持

細。雨。斜。風。暮。夜。已。過。曉。雲。空。但。遠。看。盡。花。回。夢。

古詞。之。致。寵。之。中。昔。から。之。の。年。ら。う。出。る。か。あ。り

真。ん。池。中。の。如。好。詞。を。推。り。し。ん

握。不。得。是。身。生。れ。若。帆。收。雁。聲。未。趁。著。此

脣。紅。也。靠。牙。排。數。遍。更。等。

江。上。の。夜。景。如。空。目。ん。在。り。人。さ。し。神。往。の。情

の。さ。ら。し。ん



野芳書院 扶紅口並奥金信笈珠傷斗把愛錢人  
 買得笑至口  
 煙花者裏の情は紅籠の籠方  
 此れいふ事さすのちん家か天南の  
 一花紅の紅裙をほすや花紅のうらま  
 けいともさす  
 佐有這一其半其暈痕存者天長地久  
 文同友の但只就洗不清的濃情心  
 女心起似隔  
 心は正世の中 色色羅裙袖西河の句

真  
是

又

加  
や

花紅の夢中に 夏秋に遇ひ、次は家か子有  
 の来り終のちう、分而一夏從軍の弟、家と逢う  
 こと見ら道なき最後ん、其師い遇ひ、第一物ん柱ん  
 この消息を傳す、~~...~~ せいのあ、あべこ個中  
 い聚會一来る、作者の情、巧思、のう、思慮  
 昭帯の妙もさすものさす、子物佳句、西河の句  
 阿坂が花紅紅と見て其技を考し  
 二等人隠皮有、一等人難と求  
 上の十種ある諸事、理相を粘膏、次ん  
 家かの子を借らん

24

い本つ中へんしつ 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも  
 倍倍面と融小不、りも

十ノ廿松屋製

七盧

廣州州州州 海石是花朱 柳柔 倍军在  
 海舟釣舟 刺着時一西 送了  
 紅白歌  
 暹字雙竹 答音証印 まここ曲中の境  
 同たり、りも又こえ 証証之 然也し 針線  
 樹の之 細、力の之 實受り する也 更時まに  
 子の未る思ひ  
 咳不氣他 加送抗の 新筆 有者去吾  
 新茶の二考 茶別の 勅之 同儀や  
 葉切の根 挿尾 〇まここ力あり 萬年の

此は沈黙に一聲に報答す。一鞠をゆしん  
 我化百出桂香を而し。筆亦去之協の院  
 年重方寸たる也。  
 中由勤の至客即ち琵琶行の余備也。包括  
 了了のす少多。秋中。五子結。座中。江中。中  
 最多、江洲司馬青衫墨の二句の字接す。  
 白樂天自号「高」居中の「閒」景漫の結  
 畫花清暈。不修院令折腰。景僅撰人。常與匡  
 君携手。甚。覚地。絶。梵。心。生。歡。喜。  
 一不。悲。聖。約。序。の。留。の。為。出。官。二。年。性。好。

十ノ廿 松屋製

25

白雲之意。陶令匡君より本地の切。斬下  
 乙送教也。す。あ。く。と。白。樂。天。客。を。送。り。り。  
 善。台。皆。身。上。凡。渡。臨。に。記。す。と。篇。  
 趁。疎。林。暮。景。江。空。以。鏡。仗。秋。令。暫。且。留。飯  
 影。江。仰。の。喜。色。臨。第。一。二。眼。前。に。出。す。  
 疑。子。樂。天。の。客。を。送。る。也。又。時。事。を。役。い。て。二  
 客。に。指。教。し。  
 以。間。在。逢。吉。特。門。下。侍。即。同。平。章。等。君。勝。扼。腕。  
 以。人。生。性。嬖。妬。甲。隱。多。端。白。來。陰。結。の。閑。



2)

向より先んて地電等方物等もあらず人  
 の欠り満つるを受て下りて来る。其の  
 把回信は一尋の距離。曲徑時低緊張  
 特。有。西。筋。東。筋。不。解。の。一。片。は。心。月。白。  
 東筋西筋無言。世見は心。杜。日。白。の。十。五。の。  
 海向より先。新。新。意。を。出。す。の。處。深。健。の。  
 白。切。意。も。加。す。  
 白。切。の。以。て。進。行。の。程。で。は。高。低。を。示。す。の。彈。に

大に精彩にあり

亦聲帯。似人語。凄涼考。多。實。似。軍。聲。  
 雜。運。刀。聲。也。者。信。守。世。自。性。然。也。這。切。  
 切。嘈。嘈。說。不。盡。心。中。無。事。  
 大。法。嘈。嘈。以。下。の。志。句。の。隱。拙。の。簡。淨。の。  
 相。を。推。す。と。し。の。少。く。は。ん。  
 其。一。年。別。款。先。一。身。來。把。君。花。杜。日。漸。去。閑。  
 可。憐。人。福。過。定。生。災。歎。從。軍。弟。少。快。  
 表。也。過。赴。黃。泉。死。埋。葉。沙。塔。法。護。の。上。留。  
 下。江。湖。世。情。一。福。數。  
 今年款先。後。即。年。杜。日。漸。去。閑。度。の。四。

十一廿 松屋製

三三三  
いぬり

罷おのほ、少少の時、勸業の事、結まり  
子、而して、藏園には、その名、在る事、  
你、把、此、氏、里、由、及、一、面、紅、藏、踪、跡、可、彈、者、  
臣、馬、所、無、性、臨、  
と、い、い、ま、さ、ま、の、  
出、が、主、と、ま、の、  
り、結、り、而、して、  
け、り、ゆ、り、  
い、ら、れ、し、て、

徳河、州、官、人、世、義、義、哉、  
為、甚、の、青、衫、沒、澤、  
十、廿、松、屋、製

力の場

28

と、い、い、ま、す、お、い、高、き、  
梅、の、病、者、  
い、と、美、官、  
お、楽、天、の、三、  
れ、宜、かり、  
い、れ、我、の、  
夜、を、い、い、  
自、言、す、  
備、し、

急、に、  
氣、に、  
急、に、  
急、に、

教善天下不得素の兒後同帰  
 由りてん餘餘昭々として書き終る  
 かを能く梅してあふたの美々も  
 右傳の詩と大史の詞とを拮据  
 しやうりてる素もいん人三感  
 たりやうりてる素もいん人三感  
 此の二を習ひてし  
 田信秋は乾隆二十一年生  
 善藏園晩年の依りて故  
 師

加りてりて短素  
 移りてりて短素  
 亭のつる素素  
 館に拾りて素素  
 行の素素  
 指ありて素素  
 由りて素素  
 動し素素  
 凡そ素素  
 一素素

四絃秋

第一齣 茶別

清容主人 蔣士詮 著

秋葉何人 夕儀乃池 澤平

商人重利輕別離

前月字梁羅茶去

初雷の聲聞けは 雨も 百千の 芽の芽

穀雨の空も 止つまじ 寒食の節は はや

思ひぬ りさし もりともん 車卒まじ

籠んぞ 盛らむ 若木の芽

恨 恨たる白傳の角目 茶揮を自ら任り。その  
 るの依は 悲涼沈鬱 念言無限 此の道  
 憾 たるも 雨部 昔衫 相  
 い 顔色 嗟 宇何そ 其れ 互ら 而して  
 園の才 宛下 欽 暮ま ずん 水  
 四絃秋 十三年 木栲 櫻南 絃の 彈 ずん 柳南 瓊  
 に 載す 但し 少 あり 亦 二 齣の 初 なる 平 みる 未 なる  
 其 三の 一 び ば ず 予 亦 斯 彈 は 全 く 獨 力 三 び 之 感 じ  
 と 此 ち 勿 務 絃 の 譯 文 ぬ び 評 釋 じ 教 じ 之 差 酌 ず じ ち 乃  
 ち 事 理 元 者 爾 其 其 依 也 由 亦 亦 時 之 辨



甲 春 著の衣 裳も ぬぬん  
 乙 差 母木の林 群火 集り  
 丙 魁 せりし 山陰ん  
 丁 探 ずる 軟草は 牛に 満らぬ  
 甲 火 等 一因 深ん 屢定ぬ 茶高人 毎  
 年 かうして 糶を 集め ありと ありと  
 る 茶 困ん 新芽を 賣つて 利根を 占む  
 一 氣 集め 高貴 時ん 比の 界 積り 荷  
 大 分 ありと ありと 一因 一因 ありと  
 別 か さう べし

この書の 記

乙、 火は 折 江 舟 密に ぬぬ 来た 龍井  
 日 鑄 烏 坑 欠 渚、 一 等 の 名 茶 一 品  
 丙、 舟の 受 場は 漢 口、 又 つ 四 川 の 貴 州  
 烏 龍 茶 類、 亦 舟 賣 り、 舟 賣 り、 舟 賣 り  
 烏 龍 茶 の 上 等 者、 五 十 觔 づ つ 賣 る へ 来 た  
 その 外、 雅 州 の 蒙 頂 茶 も、 一 千 觔 づ つ  
 積 ん 居 る  
 丁、 十二、 甚 次 の 基 是、 江 南、 出 せ る  
 宜 興 の 金 膏、 宣 城 の 了 山、 壽 州 の

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸  
 一 つ 出 かけ て は い ん な 物 が 。  
 二 つ 九 江 に 栄 名 世 と 子 ぬ し け 友 達 や  
 三 つ 同 じ 高 寺 仲 間 で 毎 年 そ の 子  
 四 つ 中 へ も 経 る 年 だ が こ 小 下  
 五 つ 徳 い ぬ 要 ぬ ち 昔 々 ち ば じ じ  
 六 つ 小 は 昔 尾 上 上 吉 。  
 七 つ 小 下 と お じ ち 妻 子 の 恩 愛 の 捨  
 八 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨  
 九 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨  
 十 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨

甲 乙 丙 丁 戊 己 庚 辛 壬 癸  
 一 つ 出 かけ て は い ん な 物 が 。  
 二 つ 九 江 に 栄 名 世 と 子 ぬ し け 友 達 や  
 三 つ 同 じ 高 寺 仲 間 で 毎 年 そ の 子  
 四 つ 中 へ も 経 る 年 だ が こ 小 下  
 五 つ 徳 い ぬ 要 ぬ ち 昔 々 ち ば じ じ  
 六 つ 小 は 昔 尾 上 上 吉 。  
 七 つ 小 下 と お じ ち 妻 子 の 恩 愛 の 捨  
 八 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨  
 九 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨  
 十 つ 経 る 年 出 立 禁 尾 金 の 捨



の石魚も昔と生かして持て糺す身  
けしあれば練書者露中かあつ子  
た厚三眠と夢ひ練書陰と成りあは  
を食の休人や去年よりは茶高す  
の至れ思はれ得陽江の船住居  
の知る者の如くしほ人の膏麻  
●楽もあかし丸浪打ち寄せ  
はかぢを塵埃し気強いつの心故  
と云もあけりて盡す誠は泡沫の  
水の上なる葉守鳥●あはれなご目  
十ノ廿 松屋 製

魚のりも何なりや増す夏を思  
の来りも過すぬ少な又力門出  
アノ是也の端言見やれりあき  
●景色天●嵐か水鳴く岸の自由  
羊の絡花●指ん●昔の夢  
こころの闇をみる●花理をば  
は田●紫の穂の整あぬ●小舟  
も加の傑ん流るるしと聞くと  
と運る。●浪の百中行溢るはあり

35

花 此こそ賑やかな場所へ行つて一高四人  
 廿七節もぬとあちこそと聞ま合せて也  
 うやら見込も立つたやうしや、あぬいも  
 喜んば呆小ぶかぬいぬ  
 花 ち小けすつあ人いもあいの見やへん也  
 ち麗かき春景色 夫婦同士の差向ひだ  
 えかマア 鼓動に接へる心かいた戸  
 笑 ちかや成りぬこし  
 家宅 田畑かあるはやし  
 老い産 桃の花で柳でも 利廻の金か  
 蜀のた子

笑 此の好事は能く知小の博の生花まで  
 解りやす 鯛とまるとは 室籠のし  
 か玉の移りゆく 目はく  
 茶の面への呆れ世 利息があ木出るぞ浮々  
 ち世の茶かき 旨物や男もよつた  
 船か 幼小の家ナし安らふか ちかふさ  
 花 オトよる候え来王人へん しなまア  
 ぼまを 何處に誰人て居やう 人へん  
 笑 新茶か、とりて 市に出たを小故又る  
 市松屋



あふは病氣かゝるゆい。  
花………

二小も前世の約束で影も形も唯が一つ二つ  
並つば病氣とは何の因果か恨りや妻の  
歎きまじ餘儀い見て出で行くそぢんの心  
ではまじ嬉しんで御座んや。  
笑 さういふ言ではあられも旅も随分  
の人氣ぢりやよ。  
花 4三ー！こぢきんはあア  
病のふ胡蝶も花の宿捨てて飛ぶるといふ

氣たつ如何ん縁えたる蛇いやらえ  
の狩せよ若樹ぢん結ばる縁ぢりや  
から情ぢりよ  
笑 何も其様いぢりよ  
こりよ深き酒を一つ持て来せよ  
老い女酒を携へて冷場伝達あり  
集上んま遣はれ直い追場  
笑 久しかりやあめりの縁酌心つきり  
酒盛直いやうぢん十様集まると  
ソレ、まの琵琶一曲似望りやサヤチ

今人あなエ  
 今人の如くぬあし一の親切何ぞ悪く取  
 らうぞい  
 雲とちり又雨とさる朝あ夕あの陸路ん  
 暖風残月の秋の息かりそのあかり酌け  
 呉今もあつた通り一曲弾えは吳小あか  
 琴もも菊の何じり細度小いあひ及保  
 あしが琵琶の午  
 花そんちり本當ん思り留まると下さる

弾え間あし信小所出の事は又後  
 日驚に候合あるしやう  
 酒は愁を玉帯に連の葉に透る水鳥の  
 花退紅客三防ある科  
 花少片しがまつる留のいやあかあま  
 も最早四十の上すこ一は保養も梅の  
 めし中ん思めん因えつり大忍  
 痴も出入得故ん水不思う思え下



大かゝ  
吳 才、此の行あぬわ

花退紅喜お料あり  
ありかたらのあたりけりい情に免れ  
今の無禮わらし給はる御心かよか誠の  
夫婦の恩愛。

風いあふあふ舞柳わたりはちかあふ  
かまへる留めし守りやいあふわちりの  
は犬空い光るのよぬ奥の月こもるも昔

十ノ廿松屋

河竹の流の月故過江に足み心の  
矢さゆらぬ浮気あゆのしやし思ふこ  
香瑞り生むる。等高田の平丁

妻陽の估子の妻陽の估は仲見尋ね  
あはれ罷り立てる陽の友かの陽の友を  
し強よ

丁 かつちああわが即ち鳥の屋  
世 子徳の出さうしこまへ来は来ん  
かアレく向のん見える屋形船

見らるる通りいじたりの自軒の打扱いじたり雨前の若芽し  
 一ゆうけいつしりとエこカラさいカツサ山履  
 する身い来し逢うて嬉しいるの熱いカ  
 十二節前方  
 哭 兎角、マア緩らりと坐いりやい。  
 花 長安の来を人々いのあけはなほ更い女  
 つあいらいアノゆあいの弟にい定め逢は  
 一やんいちのであらいのあ。  
 丁 ところか 大変 成績と小安下玉 肌守  
 りの忠告いか得報いを企てたがな。よくかい又

あわがているうい徳所いの巻い  
 春の江にい雙いへい楫いやいそいくいらいむ  
 丁 兄者いはい在い宅いか。  
 哭 誰かいとい思いついばい足い弟い分いよりい尋いねいてい来いて  
 妻い小い太いマいアいくいるい船い上いつい太いがい善いいいわ。  
 丁 兄者いのい御い無い事いでい傳い措い  
 花 ホいンいニい珍いらいしい鳥い子い屋いさんいをいういて  
 何い處いかい来いまいすい一い太いむいえ。  
 丁 京都い出いりのい帰いりい達い高い堂いのい親い合いて  
 また南いへい下いりいまいらいれいぬいわ。  
 十ノ廿 松屋

時中は張伯請妻お州では吳元腐い  
惡者ともかか憂へん朝遣り討手  
か四路へ分小生い今向の戦争も  
争もいふは帝統中白盟い  
風吹はありさあちうも風の便  
考之は望り居さアアらるか  
この弟も、繼長に望むか李元卿  
ふえらうい方将の手にては  
経行のわかつたやう  
花退紅なる様

十ノ廿 松屋

花 二、  
父母の間の流るの事でも編成入る  
佳定のた官去るや、亦蘭し弟ら  
船指し舟を中入るのゆが身と  
居やう、可親いやあ  
花 アア鳥子屋えん、小の時あ日ん、者  
アア、士事い首てた一の弟い  
アア、酒ら山銘やが持なすんや  
山花を命あう、當り天に在らしやう  
山花、奴、運を仕立あう、アア、障め

81

吳 口を移り難うたてて強むいそ又  
 いん女事て名ある敵の首打るなり功あり  
 柳 柳のし方情又出世とせまゝいぬん  
 もいふわ  
 花 イエエのち  
 末史官の夜中の狼煙 大將軍の凱歌の  
 夢中結つ時多ふ人かとい凌煙閣の朝夜  
 新兵の人の小冠者か繪にか、小わう縁  
 はせり  
 知 草木にまたん聞きたら作、十ア鳥子塵さ人

花 花はあまの  
 老臣紅鞆を治す料  
 死出の旅より悲しきは修羅の樂の先別  
 胡弓の風の凍りしん午に持つ積筆  
 折木もやあり心階の外更じ廻りし麻布  
 し丹十血鞘もよとじ終つたかぬの揚ん花  
 人下みめの身の上とあり陰に守るつ木  
 夢魂 還る例はあつても、く木が歎  
 かて所下りやうか

初御座る。わさの快御座り  
 達者で御座る。わさの快御座り  
 丁 身さる。わさの快御座り  
 たいさう。風前の燈火。わさの快御座り  
 湯へ茶をさす。田舎の茶。わさの快御座り  
 女華女。病にちかづきし。わさの快御座り  
 娘御。とうとう。長く保ち小やう。わさの快御座り  
 丁 子の娘御の師匠。無くもろく。わさの快御座り  
 はせの。師匠の師匠。わさの快御座り  
 島の人。曹善才。わさの快御座り

十廿松屋

ついで。冥途の藤立。わさの快御座り  
 暈を弾く。わさの快御座り  
 人たらくかの。わさの快御座り  
 花。紅。わさの快御座り  
 丁 ね。わさの快御座り  
 親。わさの快御座り  
 秘曲。わさの快御座り  
 て。わさの快御座り  
 リ。わさの快御座り  
 う。わさの快御座り

と

葉の代りてま後の極りつもさみだ南無阿  
 彌陀の御返向のせて過きたる羅御尊  
 花のしらべに二の御師匠様  
 同小煙と立七参り、張るは淡々、  
 哀れ小窓了、  
 け之ちの御返向。  
 丁卯御返向の大極へさつ、  
 換ん御返向の御返向の用が時

と

花  
 聞く事とん波の極、  
 のお枝のちのぬじ身一つの午の悲  
 迷了御返向の御返向の御返向  
 花の御返向の御返向の御返向  
 妖娘御の御返向  
 十の廿松屋

吳名世同く歎と科可  
 吳人女強体止のに  
 酒一盞置ひ、  
 吳子と對能く、  
 好酒歎りの孫子、  
 神、  
 内花はね

江戸の形で待つと一やう御もさるば  
 丁目場  
 花 ころもはくう一え事をもとこむもあま  
 け 往かや人下氣あいのちあ  
 矢 どうも高きは大車りやんやうえあぬ  
 山ばかりかまうしゆ 香らぬぬぬ  
 亭々も留の長 渡出まぬ 和を裏下り別離  
 花 男ゆかりの長旅 まで不自由で御成  
 へーやうん

あまぬ時りえ者 徹炊の新茶が今年  
 は一番いゝとて仲間一同揃え浮果来ん  
 行く相談が決つたか 深は是れも  
 兄貴に一口葉を世の各々もぬ  
 矢 ●うん、お小も丁度出あやうし思ふ  
 片たをさる、お小は頂上すく行かす  
 善は急ぎげッや、ヨトト子 年若物揃つてトツ  
 丁 せう事決まらぬ 面白中  
 丁 せう事決まらぬ 面白中

目山と下り









49

頃

別る

第二節 改官

物從去年辭帝京  
請居臥病屏尚城  
流罪の場

院子

薛存澗の院子  
臺諫告を蒙り  
世に誇りて  
在場の

いふ才の爲  
期は官に利  
ありあらず  
江州教  
院信吟を  
聞かざり  
哀れむ  
かき雨の  
某は

館中  
中  
信  
海  
の  
家  
の子  
たる  
元

つ比  
比  
元  
衛  
の  
大  
臣  
差  
朝  
の  
政  
事  
か  
ら  
ま

如  
大  
東  
雨  
の  
時  
あ  
お  
少  
ん  
何  
者  
を  
知  
る  
か  
は  
る  
官  
の

花は紅老何ぞん世場





秋

上林花の群物 臨りも惜みたる身は  
 吹らぬ風ん 散る木の葉 行かば  
 惜みの 芳名 ちり ちり ちり  
 白 情 今 日 出 立 小 舟 柳 子 舟 柳  
 州 在 雲 霧 小 舟 柳 子 舟 柳

僕 こと 子 長 一 坊 場  
 秋 風 雁 心 思 大 内 の 御  
 半 角 の 書 向 重 載 せ づ け  
 白 情 今 日 出 立 小 舟 柳 子 舟 柳  
 州 在 雲 霧 小 舟 柳 子 舟 柳  
 十ノ廿 秋屋

虎嶽とせりて送るおとこころ逢ん来  
 女よりいん元徴之もあま通州へ赴ある  
 とそわらうちるる花ら合ひかばつぎぬ  
 名残を指せ合ひ人結るるか合ひ  
 何身へ浸りおの風深に霞衣はし  
 ちあふす少少同く流るる身  
 たりはへて行年三三回丁巳成  
 夫のつはれおれりけり  
 夫人さか宣やえゆあ相ひ  
 南家と戴ける人さあらん  
 林か起は

十一廿 秋風

青妙女おのりて浮司馬の紋目と帯由せ  
 給よと  
 崇夫夫人以下皆と退場は時何  
 箱西延帯馬の鞭さる僕一  
 ち子連小て珍場  
 才子まつて長河の空へ雲向ちつぬ故  
 人椿の字葉の秋を物とし  
 草まのり出心しは九段存誠  
 官の居小お二子北府より時天守の文  
 書る見小お白地和善とのの母御

54

愛方らあふ子を漸く教へて三州流  
 罪を法にせしめあり。今日は何里の尾  
 島立教せしむるを早め給ふに  
 今自と始の務えに本車実在踏の最  
 大の善業の功に後よむ。高令の知  
 識を存せし奉りて事ごとく採  
 内をなしたるはやくある時は  
 成中にて給ふ色。愛らむ給ふまじ

55

思子

裁り恨あことある井に前して身ま  
 ありぬるを。並むる言。西の宮を  
 草花樂天が陣家に住まふ。彼の  
 母御の先つ所より。倉ら老い通す  
 し物うる所く。小刀おし自筆せしん  
 けり。わしことありし。其の仔細  
 詩。く知れぬ。偶又師に傳ふ  
 し井ん陥りし。其し。石を子の想ん  
 かし。中書。柴。承。相の。前。人。し  
 力を。程。め。解。明。也。か。ば。あ。ま。ま。の。



天を雫かし 手は名の上 欠ぬ疾風の様  
 城の振舞ひ 心もあたまも 人なりしは片は  
 かしの思ふおみ いかにか 彼と信あてし  
 かく存誠 下僕とん 仕場 白染  
 国を去り 用ひ 運とん へ ね 靉の 鞭さつ あり  
 兼あつた い 愛し とい 雲井の 空一 下 心  
 先か 下は 東華 明 兼 みの あり とき

天門の 射狼 虎豹 あり さまじくも 又  
 加えり 身 道あり 縁代りし 兼 あま  
 事の時 辰辰 あり 小辰 あり 方報の 外へ 時  
 あり 兼 白白 身と 兼 あり とき あり あり  
 者の あり あり あり あり あり あり あり あり  
 兼 あり あり あり あり あり あり あり あり  
 兼 あり あり あり あり あり あり あり あり  
 兼 あり あり あり あり あり あり あり あり

十一廿 松屋

やけあふ

上段の電出てなる。院子 於場案

院子 一州 らく 御房を留めし せ 糸 妻

が。あたらしく 主人 ね 倅 存 減 初め せ から

の 御 録 心 け 戻 たり 同 意 の 取 一 倍

この 間 ね 倅 存 減 案 室 の 内 じ ゅ 行

ね 倅 案 天 どの 一 州 らく 待 ね さん

十ノ廿 松屋

6

白 何人ぞ 三 ら 邊 の 物 ず かい さん 町 崎

ね 倅 存 減 島 三 地 せ 冷 場

7

白 初りを 暫し 柳 影 盡 させ ぬ 名 残 七 惜 ます

この 内 鞋 紋 白 赤 々の 車 介 の 車 を 推 して

下 場 ね 倅 存 減 白 案 天 と さん 馬 よ さん

白 初り 花 ぞ ぐ せ たり 道 科 案 天 と さん 馬 よ さん

8

白 初り 花 ぞ ぐ せ たり 道 科 案 天 と さん 馬 よ さん

御身大事に願ふ事取らば玉に磨かんと  
 つまは丁子の花開くその枝火を樂ん  
 目出たを帰る路を相待む  
 辭やい江州作雷水の傍區をりて  
 立者の身中のいやはや受姑の山の  
 白事新しう候こと某の關東の男  
 書を讀み文を作す外何う身はた

此言をて回ぬ事人にも無事の罪人遠  
 の御邊御傷はけしあ限も心用あり  
 の御見送りし院子申し付けたり  
 白 天下の法を犯せし罪人何とて悔むも  
 抄をあらまへ御心掛けさせ給ふか  
 ら有り能く御者衆天僅人又細は  
 この内者酒を飲ふこと宜しくその  
 二十廿 松屋

或は名を法するものなり或は仙徳を修する者  
 たり餘人はさして思を骨肉たるを母まへ  
 皆僻事とらんまう  
 後には某の事記を説きまう後には難  
 王官海の裏海深きつ成みらぬさあらん  
 送らんと決心を依りしものなりてか  
 明のあか申すは無徳に似たり小を御遊作  
 強更なる小剛毅の徳にあたりす小にの  
 孝夫がぬい年本 孫はあらしら録先  
 抑つて福を招かざるやう心やう小よあらん

のこころし、かん、ま、い、物、を、清、け、ふ、ん  
 思ひか、つ、も、ま、あ、れ、申、指、身、を、保、つ、戒、を、犯、す  
 こころし、い、な、り、り、者、未、知、初、ら、あ、る、い、は、既  
 り、ま、い、言、ふ、大、開、あ、ら、あ、る、い、は、誘、は、既、ん  
 招、ま、あ、り、れ、其、の、詩、を、依、り、て、は、哀、情、悦  
 はず、秦、中、吟、こ、ゆ、り、て、は、權、豪、の、貴、し、の  
 人、々、目、を、晴、く、い、色、を、愛、せ、し、や、あ、る、え  
 案、詠、の、詩、あ、る、い、は、政、柄、を、執、つ、る、の、境  
 境、を、ま、り、け、り、閑、村、の、詩、成、り、て、は、夫  
 權、を、握、つ、る、の、切、通、り、て、い、か、み、く、ま、く

59

50

兵将入 盜賊二人を鎮に獲せし  
 之を立てて 登場  
 軍高を為して 捕らふるも 身に染る  
 少休とて いかゞ 逃さむ 網を漏れども 己の儘に  
 伏匿せし  
 兵将 さま頃 兵部尚書許孟容のの奏上ん  
 ずり 賊を以て 捕ふ ぬる 爲し 救詔  
 もし 納めある 突き出せば 官は五品に封  
 上 錢は萬緡を賜ふと 旨定めし 小使  
 神策將軍王士則 威衛將軍王士平の

多しゆ 皇上皇帝 聰明睿智の君に陳  
 旨始に 紳望 憂の身薙 小人の群  
 思ふ所 雖し さまの 御由 許さる  
 藤 緒尤も 其 二心 肝に 徹し 其  
 服 藉致す 御を 爲す  
 白 されば  
 君に 報ひます 死するも 何か惜む  
 思ふ 報ひ 致す 少休 出  
 罪 罪 罪 罪 罪 罪 罪 罪 罪 罪

三人兵三合々して大監張母以下中へ  
十八人三目一捕りしか、いつ小も反賊王  
承宗が籍ん遣せしものもなる由  
このより大事の罪人あるは、  
初めより立てて行く候。  
わかつては首従の別せく押さるる首をば  
別ぬむ

北辞 見たん氣味よく、御邊等手並の程  
と暗慮心。  
と兵將 智恵もよく、奴等か、わのふと細い罷つて

わげの事、さるはとも、げしめ、此事と言  
い出て、ゆりし、白檀善との、は言、奴等も  
も見、ゆが、いたま、一、くの官を、  
南へ、遠く、旅、小、路、お、サ、ラ、サ、  
事では、御座、ぬ、か、  
鳥、頭、爛、額、の、鳥、紗、の、巾、を、戴、き、  
く、小、を、名、は、天、か、下、  
あ、く、小、を、名、は、天、か、下、  
か、  
兵將、改、賊、も、押、獲、し、  
不、見、て、  
其、の、所、ゆ、法、こ、  
違、は、ぬ、公、論、か、

北辞

こを樂天との心やすし、  
後世の勲も用かし、  
後世の青史も用かし、  
寛政を越りて、  
此里白は、  
口を正し、  
さらさらから、  
まじたるまじにて、  
しんせし、  
練の鞆、  
たふど、  
たてまつ

十ノ廿 松屋

白 白  
御殿の他らう  
雲此の九重の角あわら  
より君の力とこを  
配所の夢は長  
白樂天  
九流の舟の波は  
清の聲に丈夫の

01

02

03

04

第三齣

秋夢

夜浮舟夢の平事  
花退紅舟中夢を見たり

召使の老は船を漕ぎし花退紅登場

よるべ渚の持舟まことん別はつらもの  
水面上は酒人似て人を酔はす秋の色

花

花退紅登場

今宵は舟の

腕枕身の重なるまき吉のみは鴉を伴に

彩鳳の脂粉の色を洗ひ去り細雨  
斜風んさらさらと春の情は雲と消え寐

明日

白さらば  
白楽天先んて退場  
か辞まことん盡きぬ名残  
め暮さむ借けしや  
花退紅登場



乙女心の美しさ  
流も緩く水ぬるむ春を傷みこころん  
乙女心の美しさ  
秋を思ふ見か。世の時をまゝ其者の事  
小や猶り強き心へ毎に佳く世の愛をこ此身  
立ちし後音信もなきは病に成りては  
長閑けき春ははしく過ぎし  
わびし出づる心は情あつちから  
流も緩く水ぬるむ春を傷みこころん  
乙女心の美しさ

十一廿

乙  
かかて夕鞠の打寄せし帆影もまなく消えお  
時雪并を度る雁の聲は若人の跡邊  
い鳴りくゆの秋は恋よ限り兼ぬ牙橋  
い侍りて鐘の音もあはる辛らきそん  
も立身せよと夫を生して遣つたのちらば  
根も何れ言はまのりも  
婿 因あ小はこを夢と見ぬ因の盡きやば又  
醒めぬ一切起つたが小あ  
の遅娘起ささせん



いふ方々の糸糸子り糸ははらうちきり  
たの山

頃 こそ小加継りて都も出て今では残つた  
ものももの位。

花 花退紅衝を流す科

花 花退紅衝を流す科  
ホニ之時時多分物換りてさう文人家  
の方々も吹雪人無くさう木たと聞くらう

わひまや風月煙花の其里も同じと  
事のありさうな

二と下りたる其人は揚き暮せる花ありと

わひまや風月煙花の其里も同じと  
何の舞えぬ同ト事世々知らるるも理り

お比呂さ抱りて也の舟い迎つら小りあ成度か  
頃 さまの別選の衆もみん女来り木た

しんかろ  
かろ

頃 頃退揚 甲乙丙丁 四人の大雲 従者  
に金帛を持たせしめ揚り

夢の秘傳の物を惜まぬが力一錢を大事に  
す。奴は垂ゆる口に餘儀の笑を  
満足せんやと云ぬ

甲乙西丁 ところが花退紅の影と見えたるレ  
這又らるか

花 舟乗るの傳はるいらいの皆様  
は御座り給ひ申すまゝ

甲 乃公達は或度も遇つたことがあつたが  
つかつかの御座り申すまゝ  
聊かから津和を待参し

乙も面白く遊ばせと云はらうと思つて来  
るの事

花 酒を早く  
婿娘酒を持った極びて冷場

乙 婿娘酒を持った極びて冷場  
サアお前も御座り申すまゝ  
もし御座り申すまゝ早く例の物を婿娘さん  
いさる御座り申すまゝ

丙 婿 乙の婿  
婿娘酒を持った極びて冷場  
乃公達は今白

花を尋ね柳を問ひ、こゝにかうして来り  
 何の爲にまゝに人路を音人等と云  
 其方の思ひを聴かざらばなり  
 丁 正母原乃今の名前を覚え居や  
 か

花 退紅笠子科

花 何ぞ忘れり甘りあるう 這個の結方は善  
 りぬ結り

十二文 這個か

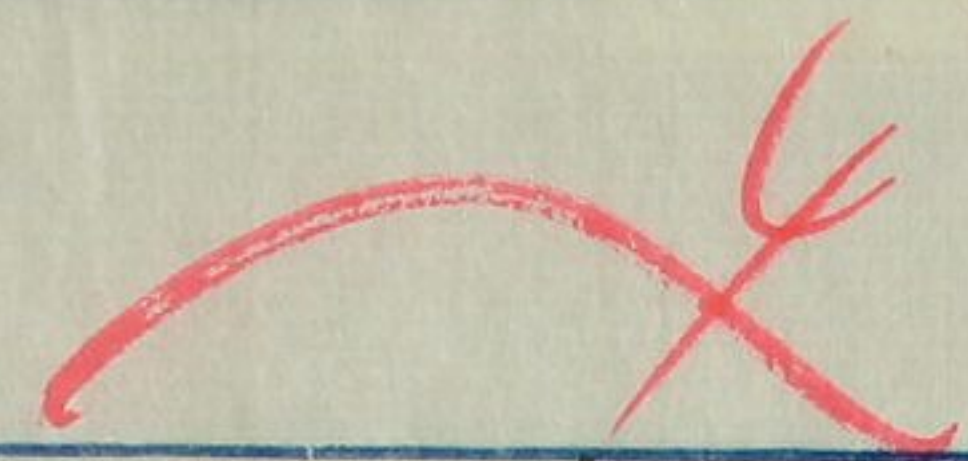
甲 ちんちん料あり

呼ばれたる御座敷の席に侍りも束の  
 間や酒酣ん秋夕時など敷方の起る  
 給ふ

甲 ちんちん事は止めりりサアの家は生るん

乙 三人の事三層の床 足貴 餘り程馬鹿  
 中 何ぞあるはむいか 昔持が 這個で 彼奴  
 か 加個 世間の人は強て 這個が 加個  
 乙 誰りもしやう 名をたを 態と 覚え  
 居る ものあらうか

乙 何ぞ一匹の糸の縁の嬉しうん洗つても法は  
 いかにうたへはあか。 花 十こ構りませぬ  
 一匹の糸の縁の嬉しうん洗つても法は  
 値の縁の嬉しうん洗つても法は  
 ちかぬ 酒の濃さを縁に加わりの心は  
 みみ 酒の濃さを縁に加わりの心は  
 この時 樂屋の内より 戦鼓の音  
 いすし 喊の聲がすさまじい  
 とあるを 殿トて退場 兵時 舞臺



花退紅酒を注ぎ廻す  
 少い當日は遠出の綺麗君が此村には  
 少い今日はこの王の盃を飲め  
 留めあまむ 娘  
 丙 + ア退場 退場はまぶるあか  
 花 ヤア酒と何とぞ、こゝから縁を  
 申ませる  
 名さへ 林の曲 其  
 丁 酒を翻す料  
 深ん  
 十の廿 松屋



かけし 戦馬の群の中を 剣を帯びて 人  
 び行く 何の為か 知る 暇も 筆おは  
 へ 小は 大将の 罰に 時々の 猿 豫り 見  
 の 傷ま 生来 弱く 生て 長生  
 出来ぬ 身を 切ら せ 小 彼 神に  
 切ら 悲の 母の 我等 文を 読  
 立てし 抑も 何の みる 剣を 眠る 魂や  
 と 籍に 飾る 結 舞 打も 揃いし 足 弟の 又  
 と ちり 飾る 結 舞 打も 揃いし 足 弟の 又  
 曹 妙 不 修 師 又 錦 衣 花 帽 白 足 袴 也

弟 出で 合戦の 見え 道へ 入りて 又 退  
 場 花 退 紅の 弟 兵 打 揃い 揃  
 甲を 午り 遣 ぶ 中 来り しが 怒る  
 身 向 け 花 退 紅の 傍に 立てる  
 負 け 陣 可  
 弟 又 危い 早く 其 返る 筋 退き 去  
 さい  
 花 花 退 紅 来る 陣  
 ち 小 こそ 確に 我が 為 何 處へ 往つ たら  
 も う 見え たり たら たら たら

毎九

一之巻場。

曹楊 其方は何を遣り申すか、又ア侍へ見

か小

花 二つは曹師又楊師又二人の御師匠様

の。後御愛りも御座りませぬか。

曹楊 相愛りすむか、其方は何れか。

花 御治へ申すも、御座りませぬか。

切の青楼に住む身は、江州三島尻浪の身

は、言葉の盡す小ぶら年古りたる其

は、盡す小ぶら年古りたる其

十ノ廿 松屋

曹楊 巾を小ぶらの辛抱、そのめんは

又美らするあらう。

花 二人の御師匠様は、その後、いこひ御暮

ら、成す不ま。

楊 乃公遠は相愛り、梨園の忠勤し

と、うやうやう、遣りて侍。

曹 其方は、さういふ、う、う、う、う、う、う、

知りたれば、い、い、い、い、い、い、い、い、

見れば、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、ま、

予、予、予、予、予、予、予、予、



花 柳あり難い御師匠さま

花は紅き花料

柳梅の姿恋せし春は川邊の舟住はたのし  
面の琵琶をたんとそそ歎くも甲斐はあや

楽堂の内より 鑑こ語りし土更を報  
曹操も二人匠場 花は紅き花料

花 さしこも夢ありつるが  
んて形く 咲さや 科

こを燕子楼し 思ひし 身は其花  
舟の上

十ノ廿 松屋

花 わしの思の結ば小てかゝる夢をなせり  
んけい

さてこそ 悲し 秋邊ん 昔の事の 祝由を  
あんなまの 見たり

楽堂の内にて 角を吹く

城の上にて 吹ますが 書角も水へ 咽ぶ  
誰か其音を さらけ たり 夢を 追ふ

花 夢の神 涙の痕で 愛この 願  
いか づらんも 濡れたる女









せんゆの何カ少の逢吉つ木の個祀  
 い誓ふゆれ事じ御死らる  
 勤けりやりの心は持まふ不絶けり  
 の心は持まふ不絶けり  
 近い負王奉り衣冠の中へ邪正を執  
 つし不が斯世の有様を  
 案書の内へり花退ぬ  
 二歌を唱ふ  
 花下柳花をいふ春の来すある雨は  
 香るんあそぬ流す水のま遠を別  
 十廿松屋

白 念ひ御水にや  
 白 土とも不思議やを弾く理に己の調は  
 舒舒とくして高き音よりん  
 せん二二使の音は母の甲を為とせぬ  
 て 見ても  
 白 徒者答をちて退場  
 白 園の限・其琴と北園の限・其琴と  
 二又都の黒ん如何少小を聴まんけり







花 この伊立つて居るのかりつて勝牛のご  
 たりまゝ。  
 白 経はは無用、マア成る方のお儀でなく  
 こそ善からうわ。  
 花 花迄ぬ椅子いせし授けあうらうら。  
 花 三人は、この御免を蒙りませう。  
 白 白楽元二つの方と改めし酒を酌み給  
 十戸御内儀、いよゝ生ま木でねは何ん  
 定めて様々の面白き事とあらうん  
 張を 尾道の音に合せて、夕人と一  
 身の上

大宮内の奥深く、夢を抱え月を見  
 懐も母の中、前世の縁の情、かな。  
 白 ちぐり埒た。この邂逅、不仕女、御逢  
 奉らば盃を洗ひし飲み道、さう控ん、こ  
 侍の者、酒のまばら、頼山陽、木か下、あす  
 こそ椅子を揃え、よの御内儀、えんご坐  
 らせよ。

聞かせよは異ふまゝか  
消えかてゐる。燈火の剪りて重なる此  
宴に思ふやし。事、知らず下  
このみ際一は世ぬか善い。  
花、人なら、お聞きたりこい、始の妻。  
花の都の十字街に馬陵造り住りし  
舞を習ひし色衣や、年は十三巻の  
花名はあらず、女は風流如く、王成  
ほころ、其鳴は頭ん、里ま、花あがし

十一廿 松屋

人、山、美、あ、は、あり、て、花、も、姿、ほ、ろ、う、か、ん  
知ら、し、女、の、身、は、誰、か、肌、の、人、の、紅、の、花。  
白、ち、る、程、上、手、の、相、違、也、の。  
玉、荷、斜、に、飛、べ、下、珠、は、浪、の、め、盤、の、上、捲、り、に  
身、小、る、雨、滴、や、落、ん、せ、か、る、と、早、瀬、の、細、音、人  
珠、の、珠、涼、と、し、て、落、る、音、の、朗、き、音、の、知、叫、の、  
いと、物、す、こ、と、あ、は、る、周、の、音、と、り、ん、眉、を  
低、れ、了、手、に、信、也、切、切、嘈、嘈、の、音、色  
の、中、に、あ、の、思、は、た、か、ん、説、け、ら、も、書、  
難、から、む。





二友 不はぬめん 事天りの とうりての  
田中泣かるとか 身んつまずて  
涙

白 某左遷せらるる二年か問はぬ  
老節も知れりしに今一は女の  
話こゝろはけいとうやらさす  
儲かぬません人の 禁律は方  
こんげ物いふあうか  
流石の恨除き難く 遺稿の悲念  
太心で 悩まぬ 地へかたや今宵  
涙

十廿松屋

白 身上げ  
一はるもいふの事いふすか善あう  
はる小まんからんか今所い  
はる

みえ 絶えし 門前は 緑ん 還め 暮の  
あかた 氣おん たりし 家さ たる 相手に  
あはれ 茶室人 浮田 末の 中 けり 荒か  
の 後り 舟を 守りし 事 業事  
昔 夢ん 見て 心を 傷め ばかり  
花 運れ 長門を 弾む 際と 科  
塔すて 廻り 田の 端の 一帯 常



琵琶行  
白居易

の肉して、一きりい金を鳴りし  
と博子を生り小は二友しとて  
場。

琵琶の世はかきまゝに某を惜まうけよ

江山青の煙を水も移り所愛し人の世の

言ふは同下成少の果。

一から明取ふ事三洋し世て  
匠行と題し一首とつらうらのは東府の

借るもつても  
世は思ひを依り人の涙の雨に降りしとて

琵琶行 白居易

元和十年予左遷九江郡司馬明年秋送客湓浦

口聞船中夜彈琵琶者聽其音铮铮然有

哀怨之聲問其人本長安倡女也學琵琶於東

穆曹二善才年長色衰身爲商人婦

遂命酒快飲彈曲曲罷憫此自教

少小時勸學事今漂湓憔悴轉徙於江

湘間尋生官二年恰在自安處好人言是

夕始道者遷謫意因爲長句歌以贈之

凡六百五十一言命曰琵琶行

身陽江晚夜送客。把尊花枝聚。主人下馬客在  
船。舉酒欲飲無管絃。醉不成歡。慘將別。別時是花江  
浸月。忽夢水上琵琶聲。主人忘歸客不存。尋釐暗問  
彈者誰。琵琶聲停欲語遲。移船相逐相見。落花迥  
處重開宴。爭呼萬喚出。來迎。抱琵琶半遮面。转轴  
撥弦三四聲。未成曲調先有情。弦弦掩抑聲聲思似  
訴。平生不得志。低眉信手續續彈。說盡心中無  
限事。輕挑慢捻。批撥絃挑。初為霓裳後六么。大弦  
嘈嘈如急雨。小弦切切如私語。嘈嘈切切錯雜彈。大  
弦小弦為玉盤。間關學語花底鶯。幽咽流泉水下灘。

鐘

2  
水次江邊信。絕絕不通。琴聲欲別。有此悲暗恨。  
生時無。琴聲欲別。銀瓶乍破。水漿迸。鐵騎突出。刀  
槍鳴。曲終收撥。當心畫。絃一撥。如裂帛。東船  
西舫悄無言。惟見江心。秋月白。沈沈物。撥抑絃中。收一  
聲。妙手。必當起。歎。客自言。本是京城女。家在秋。暮陵。  
下住。十三學。得。以。成。名。所。教。坊。第一。部。曲。罷。後。教  
善才。眼。常。一。粒。成。每。被。秋。娘。妬。土。陵。年。少。爭。纏。頭。  
曲。紅。綃。不。知。數。翻。歌。銀。燭。盡。羅。帶。解。雲。一。色。羅。襪。紅。  
酒。沾。今。年。歡。笑。惜。年。華。去。春。風。不。度。玉。關。道。第。一。聲。怨。  
阿嬌。花。老。去。却。未。顏色。好。一。門。古。道。黃。鶯。啼。盡。老。



方家作商人婦。商人重利輕別離。前日伊果富。奉去  
 去來江口守空奴。遠如昨日江口。明月一。為深。不  
 夢の身事。夢帝粧。淡紅。開干。結。望。思。已。歎。息。入。少。  
 此。皆。重。唱。也。同。是。天。涯。傷。旅。人。初。逢。何。必。曾。相。識。林  
 氣。去。年。錢。寄。京。滿。江。臥。病。得。陽。城。得。陽。地。僻。甘。音。樂。  
 終。成。少。絲。比。聲。住。山。臨。江。地。低。過。黃。廣。若。竹。遠。宅。  
 其。圓。且。暮。少。何。物。壯。能。帝。血。歸。哀。吟。著。江。花。報。林  
 月。吹。經。經。西。南。運。獨。傾。豈。無。山。歌。與。村。笛。嘔。咽。嘶  
 難。如。臨。今。物。少。君。既。道。語。以。猶。仙。樂。耳。替。明。莫。怪。更  
 能。彈。一。曲。為。君。翻。作。思。恩。行。感。我。此。言。良。久。立。却。坐

十一廿松屋

是。位。轉。急。淺。淺。不。似。向。前。路。滿。院。沙。又。皆。掩。近。  
 依。間。之。一。法。中。位。下。誰。最。多。江。州。司。馬。青。衫。得。  
 車。歷。白。樂。天。加。妙。待。之。作。了。日。在。由。來。未。出。之。の  
 自。序。に。書。し。て。居。る。が。こ。こ。は。為。中。の。中。の。  
 と。云。え。平。た。く。説。明。す。る。こ。と。が。あ。る。唐。の  
 宗。室。の。元。和。十。年。白。樂。天。は。七。月。白。樂。天。  
 白。樂。天。は。係。る。刺。券。の。中。暗。殺。さ。る。か。い。と。い。う。う。  
 白。樂。天。は。首。を。こ。こ。上。路。し。急。に。賊。古。捕。つ。て  
 國。恥。を。雪。ぐ。が。一。の。急。務。で。あ。る。と。論。じ。ん。が。し。









8.

胸の邊を撫でニすりて手すきききたる狀を  
 りの西船船は雄山に宿は情無の沈水  
 思業して居る貌の整へつらふの歎  
 容身おまひを正しきもの如き陵之雅録  
 い京北の名山南六里をけりしとあり西京  
 雅記にものた重仲糸の巻をあり則史補ん  
 つ武帝宜春苑ん幸をさしき毎に此陵ん  
 三つて鳥上りつり時ん之を下屬陵ん  
 台の遠くらん何と岨暮陵とせりしとあり  
 東坡の待ん隻鶏致志吾公話下屬脚

あきら

せと云案か月賞りて元曉をあらう大来ん  
 音傳心ひの祥は翠難漫志をいん見え  
 所の日大由貴業厨難縁に見やの曹浦の  
 のるのまことの切切細かんて急をきこひの錯  
 難入り交るの間關野の澄れたる貌今  
 ころくは能く廻る此の遊帯さる面白く  
 啼く状をいひの難は早粒の巨造造  
 り帯るの遊は流物解の  
 文をその子の水邊遊は流物解の  
 踏甲冑を若を踏馬の武士の者心  
 踏は

尋ね相境しあるの初坊内廷の楽部云  
 宗の開元二年左左初坊を遷りて若樂を  
 教つた日善才曲師の稱琵琶箏の挿入は  
 元和年中の証也琵琶箏の善才の字名  
 人があつたといふことありて又小出人の  
 らしりか妙待の白原孫曹二善才とある  
 かつは曲師の痛院と見た方が稽古であ  
 るの初娘美々の名借りて世上の美人  
 を指す西漢昔の傳に藤小所おた耐  
 の字に附初娘とあり女とありし又白樂天

しと回りと杜杜娘と子女かある善才の字  
 と有り餘の初坊宮いほのせら小縁に杜教  
 が三三流りて五七の長い向かある初らん  
 杜娘は初坊せん有り藤小の如娘の名と  
 見えの初娘善才の言祖は長陵善才は  
 安陵善才初坊は濁陵善才は長陵善才  
 は平陵善才初坊は長陵善才は長安の北  
 の山初坊でその邊に家富の家ありあつた  
 初は長陵善才の初坊は家富の初坊といふ  
 美んたるの煙囪初娘の初坊は初坊といふ

又念化者以凡俗著之者よ、名品書  
 益すの鬼し、劍南に家傳五花あり、常州  
 い美興此等あり、西は果の商賈は真  
 かろおしとあり、海果は茶の産地、昔  
 名あり、愛するは、江口、船場、子、  
 の、精、米、粧の字は、香、美、力、し、の、關、平、海、流  
 益、江、の、楊、子、江、の、一、葉、を、流、し、一、枝、を、以、て、益、兩  
 は、不、成、の、西、の、存、り、深、は、瑞、昌、好、青、益、山、と、り  
 出、が、亦、え、益、水、と、名、つ、り、相、傳、お、し、あ、り、お、お、え

和物、即ち今の子花の、紅色の薄絹の  
 銀、即ち、整、拍子、取、え、打、可  
 日、白色は、船、赤、色、の、羅、子、の、福  
 福、作、前、お、の、お、ま、の、子、の、福、子、の、り  
 意、を、用、ひ、か、る、こ、の、か、の、阿、姨、阿、姑、婦、女  
 の、稱、呼、を、い、か、の、字、を、付、り、て、呼、お、り、同、に、妹  
 は、母、の、由、味、即、ち、お、母、の、得、し、は、霞、い、れ  
 果、傳、の、莊、帯、を、稱、す、語、ん、思、は、る、の、字  
 果、傳、書、此、理、志、ん、饒、州、い、は、果、の、あ、り









この時、  
 川の音が早急なる  
 其水の流が冷い  
 鉄橋実出し  
 松の如く  
 打ち世  
 弾

の切々として、  
 細く且つ急なる  
 松の如く  
 打ち世  
 弾



16.

の客もやう、あうは生此も立ち並ねる  
 9か、かむむ、建世の身、身、其終ん  
 泥足に改つる高人の事とあうた、  
 高人も立込たもの、善い、い、か  
 かうから遣つて行く位、あ、あ、あ、  
 節各の身、と、言、あ、あ、あ、  
 緇録の利、其、其、其、其、其、  
 若、若、若、若、若、若、若、若、  
 等、等、等、等、等、等、等、等、  
 出、出、出、出、出、出、出、出、  
 仕、仕、仕、仕、仕、仕、仕、仕、  
 不、不、不、不、不、不、不、不、  
 在、在、在、在、在、在、在、在、  
 守、守、守、守、守、守、守、守、

羅福は酒を翻せ、い、因、え、は、  
 物、休、車、人、舞、え、去、う、そ、  
 身、か、ら、年、中、面、白、を、あ、  
 北、日、暮、れ、の、ら、ら、ら、ら、  
 一、か、る、海、親、身、の、弟、は、  
 二、從、軍、し、た、味、人、あ、  
 人、り、う、あ、年、を、あ、  
 日、ま、の、船、昌、と、は、  
 出、る、い、あ、く、舞、島、来、り、  
 侍、子、あ、あ、あ、あ、  
 十、廿、廿、廿、廿、廿、廿、廿、  
 松、屋、製







此後をいつは書江州司馬即ちわく申す  
 拙者が一領の青衫盡く濡れおかりん泣き  
 咽人なり  
 餘論 此の詩は白紙の集中の程に長恨  
 秋に相違ふべき一長句なるのみならず  
 花柳の致しむ形容一はなる如きは  
 いかし或は好詩を以て白雲天が唯だ  
 所のあ遷殿の毒一を懐疑と題寫  
 する為の如き全と悲傷の本よりい上  
 の事書すそのむらうと送と出たものん

寺を伴ふ、その野をいかるらうん  
 かくて南婦休 秋が同植の意を感  
 い元バ、ゆい、の御はつらぬん、居  
 た、か、も、か、り、て、坐、を、在、り、て、任、は、り、ん  
 信を捨をさすたか、事、た、た、る、御、言、さ、す  
 し、中、の、ま、ま、し、り、し、お、つ、て、愛、を、愈、あ  
 物、事、の、悲、しく、海、は、軍、中、に、ま、り、ん  
 くら、木、の、海、に、接、せ、ぬ、か、り、ん、感、傷、の  
 相、給、ん、ま、措、つ、ら、ぬ、か、り、ん、感、傷、の  
 下、の、ま、ま、し、り、ん、感、傷、の、ま、ま、し、り、ん



27

下の冠分田の後、謂う。僅直快里の人  
は夢りよみぬこといあらうが、多持不露  
の案天子より飛んは尋常茶飯もより  
何の造作もあらうとある。彼もいん  
挟むところなく、聊か疾しき雨ちまがたん  
もとより物後の根皮せず、たは存命了  
佳人の末由ん同持を言也。同持有  
相持あの上をいん。一命絶あの時局  
を伴つたところあらうと面白く、納の  
侍人なる本能は、熟るさう、こころ存する。

と、我ん歌を言えん人、貴い此事  
あらう。怪とあやむこといん。こころ存す  
る。後強かた介、かたあ、く成る事ん  
し、か、不身人、命案あ、かたあ、かたあ、  
ぬから起つて、鬼強い。細な、忠存、同持、  
と、と、い、一面、柱、は、  
情多根り、い、酒、段、不、露、返、之、た、子、  
起、新、一、今、を、の、い、は、い、道、字、表、原、の、  
路、暮、天、で、は、た、い、夫、の、あ、在、と、言、る、  
置、の、あ、と、深、飲、舟、中、に、呼、あ、お、め、ま、は、  
李

十ノ廿 松屋製

見

以之則十九首た子借高飽風谷中用  
正徘徊一彈再三歎慷慨有餘哀及び  
杜甫の 歎が揺ち娘ふ子無劍行この  
為と同一く 4 林の飽調りる 必ずしも  
亦はを以て 不ろをたをのちう しっい  
徳潜の 同宿相清ある意 漸々  
人を知る こと 一の 担を肯降する  
と 張り 二 反を 仁と 志と 志  
す 一の びや 次大 好の 有り 於  
の 故工と 強めば 冒頭 句提起 して 樹

の 不 可 少 事 是 存 也 詢 可 不 宜 也  
遂 然 不 疑 遂 然 固 之 以 之 此 與 之 言  
之 下 清 水 明月 の 然 り 者 之 疑 遂 然 矣 然 の  
音 之 可 奇 高 昂 自 新 の 者 之 疑 遂 然 矣  
以 之 於 於 臣 久 矣 之 懐 之 然 可 奇  
この 位 下 之 疑 遂 然 矣 乾 隆  
帝 の 疑 批 之 高 昂 逸  
昔 之 以 之 三 三 友 矣  
あり 此 與 相 待 一 等  
細 以 之 疑 此 の 音 義 以  
論 の 感 高 昂 也  
同 宿 相 清 の 意  
此 遠 深 之 意  
思 之 疑 遂 然 矣

十ノ廿 松屋製

遠に惟是江の秋の句を以て一は月  
 と留めんとしん上ん床にて映帯の如き  
 つかきよ底の如き也。この間句は  
 漢の美の極の音節の如き事一は從字  
 未の語尾を以て其筆を以てしん  
 黄絹の婦也其の次ん自言本是言其女  
 一語を以て之を行く其法の如自ら其  
 空へ今や空へ守小のこを録

起りしつゝ先の長巻を以てし其後  
 の月を以ては潤とす。次ん大に  
 伏線を以てし其の長巻の如き事  
 雨より以て十二句は長巻の如き事  
 客すよとてしん全篇の粧彩とてし  
 抑揚あり其の如き事。此の如き事  
 末の多の詞人が此の如き事。此の  
 如き事。此の如き事。此の如き事。

古詩韻範の作者は風景又は細に詩の  
 韻法を端り且つ主と長短の比較して下  
 の如き言をわらわく高韻法前待と  
 同りかき前待は首尾務整く不は  
 首より中間に三句を錯し一章  
 法を以て美し事終るる句法を以て  
 音節白ら短促なりし中間偕女の語に  
 物事んまを以て一韻を盡すなり後  
 又自ら錯すんまを以て長段一韻を用ひ  
 蓋し諸長く音節を以て自ら寛くし

遠野の江氷寒の一句は又日月を  
 有る無意の中上へ應じて音節を  
 二句も隙間ぢりすの事ではあるが  
 隙間を以て細かに立七廻る所を以  
 下四句は作者の嘆息の意を寫し以  
 下十句は作者自身の所歷を述ぶ  
 又一韻を以て三行り前と權衡を  
 均衡し主段二句一韻を置て再彈満  
 結句は下二句を錯し末二句を以て收  
 結し諸短く音長く要の節韻を以て

十一廿 夢屋製  
 古詩韻範の作者は

まるとまゝに 自ら依りて 格をばかたし 詩  
強ひて 他人の 待を 強ひて 十 一 の 此  
い 活意 一 へ ね 細い 身 緋 せ ぬ は なる の  
て 一 かり 後 臣 工 者 心 の 好 意 あり 三 助 び  
す 一 なる 心 へ つ 舞 音 の 好 意 あり 後 三 見  
け 一 なる ま きの の ち なる 一 狗 へ 妙 法 其 知  
こ 言 一 なる なる 一 一 便 なる 一 一 一 一 一 一 一 一  
れ 一 なる なる 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一

二 待 操 約 法 之 玩 味 古 詩 用 格 の  
法 一 格 之 思 幸 心 也 又 一 一 一 一 一 一 一 一  
こ の 為 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
の 偏 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
い 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
格 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
三 遠 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
依 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一 一  
十 一 廿 松 辰 製

青衫淚

青衫淚は母島孤蓬の樗人の雜劇の二である  
 島孤蓬は元時より移る開漢師鄭統輝考  
 孟符と名を稱しじり開漢鄭君の梅一也  
 此曲の巨擘乎三つに自カシカたといは唐詩人  
 李杜の聲名なりし事同い事柳蘇辛と云ふが  
 如く全く其時の又落を也表する飽一人  
 也。孤蓬は漢代東離方起る人官は江浙  
 行者の務官であつたと云ふは外の手は



とらふりあり。彼はもと卑官に居たり。其  
 雜劇の作者として、有数の大家として、  
 あり目がある。い、河内、  
 可見えぬ。そのまゝ、  
 他の作家は、  
 孫達とて、  
 を混同しては、  
 馬東離は、  
 の宗室、  
 萬葉府格勢は、

十ノ廿 松屋製

唐

陽の、  
 麗の、  
 大の、  
 凡の、  
 英の上、  
 小の、  
 馬の、

歳

十由雅也漢宮林仙風子唐福神青彩渡  
出陽樓上直果夢夕陽博音以保入天始同  
酒結頰奇紅障或寔卒成天人始雪身  
梅男丹陽とこのふや漢博音始  
以上七種の執刻は今の元曲選のゆん張之  
居るものと元曲選の元曲選の比較的多ある  
甚依を留めたるものなり永く以てその聲有現  
の尋常なりとのことなり想見すべし  
こよ中漢宮林は王昭君入胡の事と強  
子由素すべし人の法系と善心との

十の廿松屋製

上のこの曲は呪詛の語彙の起る曲盡  
し然る元曲選の開巻第一列してあるもの  
このゆん張も多しといはれり元曲と  
いつば直に漢宮林と臨想して後と為致  
漢の名も亦打ちあつるものなり  
○幸しとらむゆばたのゆん張の諸作はかん  
よりるる荒かた小字にまゝかん大方家の作なり  
ありとらむゆん張の真似のしと幸ぬ  
面回の海もあつて青彩渡の四王指とら  
以下は休めりかた亦を以て世に始麗梅とら

片のりある

青衫後には白楽の既隠行ん本ありあも  
はらわらふもあまの問はずその脚色は全  
作るの精魂の来りちるも ~~我~~ 後  
形相定する。そ英小ぬよる。そこい  
純白のちぬと述よと見やう

白楽天をいん東都侍即ん位に 輪軸備修  
たる ~~○~~ 曹浪仙 ~~○~~ 友と 善く 宗  
宗印信の御年 考の景色の長閑けまん無  
美人 ~~○~~ 相後り服装の改め白衣者去ん打掛

十の廿 松屋製

この  
名の字  
士華  
の字  
の字

教坊に止ころ教坊に装束女といふ名  
妓ありて ~~○~~ 曹浪仙 ~~○~~ の名手 ~~○~~ 曹浪仙 ~~○~~ といふ評判がある  
か ~~○~~ 之 ~~○~~ 手 ~~○~~ ぬ ~~○~~ と ~~○~~ 見 ~~○~~ 中 ~~○~~ ~~○~~ かも ~~○~~ か ~~○~~ とい ~~○~~ 三人 ~~○~~ 打 ~~○~~ 連 ~~○~~ 人  
こ ~~○~~ 其 ~~○~~ 家 ~~○~~ 人 ~~○~~ たり ~~○~~ ~~○~~ 曹浪仙 ~~○~~ とい ~~○~~ 興 ~~○~~ 奴 ~~○~~ とい ~~○~~ 見 ~~○~~ 白 ~~○~~ 楽 ~~○~~ 考 ~~○~~ 元  
か ~~○~~ 口 ~~○~~ 開 ~~○~~ け ~~○~~ たり ~~○~~ 大 ~~○~~ 坦 ~~○~~ の ~~○~~ 徳 ~~○~~ 言 ~~○~~ と ~~○~~ 喜 ~~○~~ ぶ ~~○~~ 今 ~~○~~ 来  
る ~~○~~ 特 ~~○~~ 理 ~~○~~ ち ~~○~~ とい ~~○~~ 子 ~~○~~ と ~~○~~ 興 ~~○~~ 奴 ~~○~~ は ~~○~~ ち ~~○~~ ら ~~○~~ 酒 ~~○~~ と ~~○~~ 上 ~~○~~ 層  
ゆ ~~○~~ の ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ とい ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ の ~~○~~ 二人 ~~○~~ は ~~○~~ ち ~~○~~ ら ~~○~~ 酒 ~~○~~ と ~~○~~ 上 ~~○~~ 層  
酔 ~~○~~ つ ~~○~~ とい ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ とい ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ の ~~○~~ 二人 ~~○~~ は ~~○~~ ち ~~○~~ ら ~~○~~ 酒 ~~○~~ と ~~○~~ 上 ~~○~~ 層  
は ~~○~~ 今 ~~○~~ 白 ~~○~~ は ~~○~~ 一 ~~○~~ 更 ~~○~~ に ~~○~~ 帰 ~~○~~ の ~~○~~ とい ~~○~~ 明日 ~~○~~ 又 ~~○~~ 来 ~~○~~ とい ~~○~~ 編 ~~○~~ 目  
にか ~~○~~ あり ~~○~~ とい ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ とい ~~○~~ 曹 ~~○~~ 浪 ~~○~~ 仙 ~~○~~ の ~~○~~ 二人 ~~○~~ は ~~○~~ ち ~~○~~ ら ~~○~~ 酒 ~~○~~ と ~~○~~ 上 ~~○~~ 層  
抑 ~~○~~ の ~~○~~ 才 ~~○~~ 子 ~~○~~ 佳 ~~○~~ 人

しんぎ  
の  
しんぎ

相馬のあつたつた

の時宗宗位に在り

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

中  
頁

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

しんぎ  
の  
しんぎ

大

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

勅授の國

抄

あえ、高政高用の見初の今、装與奴  
の名を守りて侍つて是非通つて見たらしむ  
の先の真家ん多う、興奴の母装媽は  
見通つて、とうか娘御に通つて告ふらる  
し、たが、興奴は、崇天の孫に帰るをは  
誰にも通はぬとて、早く指さすをはるが  
と、手の付からず、一切是非通つた  
いと、子やらば、一封の書半封、依り、白侍印は  
既に死ならず、一封の書半封、依り、白侍印は  
はぬ、とうか、一印、たん、役人、で、おも、子の用意

御守

御守

このころから、装媽は、興奴に向る、世が地  
の、言ひを聞け、とうか、色を静め、割印  
も、其孫ん、跡付ふ、移り、言ひが、興奴は  
と、承知し、一人、飛脚が、来て、白崇天の手  
の、使者を、一封の書半封、依り、白侍印は  
既に死ならず、一封の書半封、依り、白侍印は  
はぬ、とうか、一印、たん、役人、で、おも、子の用意  
ある、半も、見し、とうか、見たらしむ、白  
崇天の、書が、二封、中の、半書、で、別れ、見たらしむ、白  
と、書想いひ、心片、時も、左右、とうか、不。

ことせらふ、  
 思ひ出さるる此の歸つて着るは  
 病の推し  
 茶好むと此飲に且夕の過るる所  
 候は、  
 書のこの、  
 舞うたさるる、  
 侍御さん、  
 と、

十一廿 松屋製

事  
甘ん

一家でよと子の前、  
 親事、  
 と、  
 又、  
 一椀の糖、  
 と、

悔哭するを忽ち一陣の旋風故紙を吹  
き飛ばす。興奴不意に二はめり白侍印の  
靈魂が来たのであらうと目を見つゝ驚き  
悲み見の目の痛まりはありやうと別印  
は其傍の居て大姐故紙ともした嫁の衣  
を脱ぎ去り、不意に船に乗り、一好に  
胸に帰らうとほあはれとて無言の三三  
引をこぼし、行かるところと興奴はあはれ  
とて、御身は唯が下の夜に或文の目を  
止めたやうに、4柳葉里の遠方の地  
にありぬ

春は  
さそい

女定めて満足であらうと怒言を述べ立て  
るが、若母は何とも思はぬ様子、別印は  
傍らに立ち寄り、この後、道々知世治  
いながら、ながれ、水車、再び起ん上る、御目  
にか、らうと、い、ち、ち、去る、佳景、あ、あ  
別印、若母の指環、い、い、白楽天の履、  
紙、袖、へ、う、あ、と、興、奴、と、期、を、い、ふ、を、  
断念、せ、め、あ、あ、と、無、理、経、年、の、あ、あ、と、  
送、け、め、あ、あ、と、  
白楽天、あ、あ、い、江、州、に、赴、き、居、る、と、一、年、

基  
ま

目録

欠る驛中より来る報じ、この女は元稹  
字を微之とすもの、庸訪依い伴、世視の序  
に比史に来りたる、  
酒者の用意、待つる所、元微之  
果し之来り、初見、久闊を新し、さして意の  
酒宴を開かうしもの、微之、えを待し、  
は、書く由に留めたる、さして、の事、酒  
希る船に移り、緩々飲まう、では、  
が好ん、坐す、其言に、  
酒者、船に揺ばせ、  
十廿松屋製

9

17

舟を漕ぎ下り、半年の後、江州に  
一、たらら、其地、留まり、日、  
で、別、何、  
王、官人、とら、  
在、  
信、  
い、  
命、  
天、



酒  
末

犯罪であるが、いつか海をさやうとす。この時  
 は樂天感の増地つす。今わん今偶来は遠行  
 の一筋を任うたうと、興好に見せ。昔は  
 是は物の運送行の神分あるおの簡安  
 者。酒はたあある。あな無意味たもある。  
 其の即は地壺の酒を解つて、午島近つた。  
 其の舟に降り、十房の何更の店をた。喜ま  
 子の中、い知小て、病て、信者、女、興、奴、ろ、不、見  
 乙、這、奴、眠、つ、と、知、ぬ、間、女、言、女、は、相、合、ん

強ひて引を運かて来る。才子佳人  
 京を去る。あやりのは、何に、移る。料ら、か、も、こ、ん  
 再、層、と、あ、る、を、可、も。白、樂、天、先、つ、三、間、を、ん  
 世、如、何、や、木、は、~~南~~材、が、歸、系、の、子、待、え、が、い  
 一、の、高、麗、の、舞、え、~~は、る、く~~此、夜、ま、る、ま、ち、あ、い  
 ち、か、と、ら、の、と、興、反、ふ、ら、各、へ、一、言、毒、を、飛、し  
 と、い、い、か、が、つ、お、り、し、ま、り、も、~~は、る、く~~一、く、強、し、出、す  
 する、と、元、繼、之、傍、に、任、る、と、~~は、る、く~~三、三、聽、~~は、る、く~~  
 いて、白、樂、天、を、感、め、~~は、る、く~~この、唐、字、紙、を、作、つ、と、ま、り  
 い、人、の、死、を、使、入、人、の、家、を、踏、せ、~~は、る、く~~は、あ、さ、さ、く

貞徳

從て去らうとつひに元徳三才鑽三館の  
乙舟を遊めし引ひ臨んで案天の向ひつら  
帰るの上は天の子に妻の口帰るの慶を  
わらた有り行めりつらふ也元んは軍を去  
辨し與奴三平の御向の定象せしめらるんや  
うそひの事と白案天大の喜人の其恩を  
與奴を連えん還えん信譽を削一即はおか  
面能きて起まつ上り與奴停ら在中あり  
の上ありお有り散らつて言のそ見え大  
い喜るに本はよりやんがれちのゆかき

元徳三

いり

美 遠

26

此所世に出ん相違せしといふ大層  
善き立きて捕卒をのりて笑はせ  
来り何事なと問ふ削一即答つて金  
中二枚から連人て来ん女房が無くた  
定めを逃げ出さるをあらあらわうか  
岩小のりといふと捕卒大に怪し月初の  
江上一隻の船の来録るのたき惟不はの舟  
かぬぬい在中はかう何と世中を往くを  
あつらんは其妻新しゆかきいん女  
事をつらのたううまをん却れせぬ

27

古本

は

冠帽を著けし申符のありて天子玉音を  
 賜けり侍給事縁由を侍て細御後事  
 小期際すかきよと仰せらる。典叔謹んで  
 下の跪りて前事之詳し述べ見玉ふ  
 皇女を教へて田子文武中より人が白  
 命易たるか一見揚子の教へよら子と典  
 叔直に三見たり。子上京は西宮寺に  
 子学せし。自見た人にも忘木まをぬして  
 方子のみを教へて下し。一約の人跪りて  
 新形を膝け。古よりより。頼風他を整理

古本

は

は

は

古本

無罪を考へ且つ紫典叔の事より証し  
 天子元之膝見けり思ひ又白樂所の  
 不華を措け侍給事印の爲職に授けし  
 是れん還らるり。甘原朝一印の事は紫典叔  
 之時り歩し直々御尋ねありとの事  
 白樂所の朝一印の事は紫典叔  
 元徴三太をの朝一印し後白樂所の  
 指さるる之州徳いりす云々行り朝一印は  
 去るる。飛合もその事にかうたの事あり。

りと一旅に送る身陽んまり江干客を  
 送りし他は芭蕉を聞け相遇ひ悲傷も故  
 人の至極相別れ一曲を弾かす情懐を行な  
 の臣節の感歎多きを雨のちかり悲啼し  
 涙を裳に置きて前まい後を袖に留め何ぞ  
 便に物奪ちてもよへ止也何ぞ妙かな言  
 この事耳を聞かんや世に世にけり  
 風月を效木と為し白居易は似ほ藤原  
 に侍りて非末人なる栄光を享りたる者  
 は文墨は津林草子新一身は遊方ん

たるに休めり男女情房の事し。これ菊  
 野か首をうき見てか詩人の意深なる言  
 へし紫雲奴を主人と案藉ひ所り備物  
 多し本と立つるここの國方の良人を見  
 地するより風月の排揚を脱離せんとす  
 遊羊會旅根遠て他へ去る高の故  
 水々やあはれさるも紫雲奴に望みし愛れ  
 ありや司馬の還却を待つ若虎方良  
 ありや計を定め船書を寫したい身  
 元より役を遂げ他への悔へ場へは高望  
 十ノ廿 松屋製

14  
弟よび同時ののりてあるまじきよし  
子孫は正統宗統のなりしをせんあり  
丸の時代の違わかしより戦争のありあけい  
も善のわりあひあり。かつ不傳の傳あり。たす  
は白樂天と紫雲とにけり。めり相違のこころ  
教へたる。天曲中に於ては、あはれ見ると、さうの結構  
ていへば、陳君と相あるあり。この次に、あの子  
ていへば、白樂天の左遷を叙して、あはれ、その家  
儀を述べ、その因は甚る、善を語り、その  
ていへば、白樂天の性格、その點は、木こ所、あはれ、予二

もしも長  
遠行よ  
ゆんた  
あてあ  
かある  
はあ  
はあ

依竄せしむる、善別並に和由あり。え  
と、總のいん、個孝を拵、植てもあはれ、あはれ、あはれ、  
持て、揚ぐ、由、紅、櫻、詠して、臣民のあはれ、  
世人の王業のさす、少、真、梁、好、尚、その、少、刑、  
せし、小、才子、佳人、その、~~あはれ~~、天下、晴、木、この  
あはれ、と、せり、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
青、衫、後、の、結構、は、から、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
院、の、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
曹、浪、の、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
を、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、あはれ、  
十、廿、松、屋、製

佳美人

折は新一郎の唇半減り作る 美人まゝに装  
興ぬる半の丸と子一筋で 劇とては  
殊ん面白く脚色も多の稽察とあるし  
装興ぬの性格と描き 極めて周匝  
煙草の癖の面目さから 作らるゝおめらるゝ  
興ぬる心ん樂天の死を 止しむる身元  
新一郎に世せしころは 到底争けぬ女  
の仕草で 上男の節 楽多なる 流石の作有  
す。こゝは 世来ない。こゝには 流石の作有  
が 喜ぶ用ひたことと思はれる 第三折 白楽天

月如の

如

と因る

け  
ま  
ら  
ん

天織之を送つて 江上に遊遊とす 興ぬ  
と再會すこととのを 全篇の大関目である  
この筆致は 前折に比して ありし強ゆるの銘  
板を、あめが親ある 唯が 興ぬまゝに樂天  
に 控へるの少くは 新一郎 酔へ其母に帰  
り 其の母 妻を呼びて 其の母に酔倒し  
て 床にりしとあはれを 極め 面白く描  
く 下で居し 新一郎 眠より 醒め  
ふと 呼び立て かがえ 捕平に 控する。處女は  
聊か 階下の 趣あるし、その前に 控ける 興ぬ

化子の白楽天の人物はあつた  
 のらん脚色を評し心直直の  
 徒居る一物の見事に情も  
 言すれば白楽天の唐宮へ  
 小ぬこころ思ふが如く何か  
 いかし全痛まじし其曲は  
 なるもあまのし煙綿毒  
 なる身跡遠の依と

事怨の悲痛の趣を況し  
 奴をいしやうをいさる  
 奴をいさるやうをいさる  
 衣敷をいさるやうをいさる  
 理の程をいさるやうをいさる  
 事怨の悲痛の趣を況し  
 奴をいさるやうをいさる  
 奴をいさるやうをいさる  
 衣敷をいさるやうをいさる  
 理の程をいさるやうをいさる

性格  
 心直直  
 心直直

その他作家の如く、子真似ぬ生れぬと云  
ふも、さ小は全物より日強量し、この劇は  
馬路邊の作中に在るは、**中位に所**  
するの**中位**より、**中位**に  
からういふ事なり。

# 青衫漫

記

青衫漫は、明の**殷吉典**の撰、人が傳ふの二  
つある。殷吉典字は、遂行、**崇江**の人、**隆慶**戊  
辰の進士下、**福建**提学、初使に、**鹿**、**後**  
や、**小**、**名**州の知州となり、**開州**に、**改**  
らる。官邊の任歴は、**おつ**と、**おつ**、**おつ**、**おつ**  
葉、**遠**、**丸**人と思はれるが、**詳**、**め**、**の**、**信**、**記**、**作**  
**事**、**下**、**任**、**記**、**の**、**詳**、**め**、**は**、**方**、**張**、**分**、**ら**、**る**、**大**、**典**、**侍**  
と、**善**、**ら**、**し**、**書**、**閑**、**集**、**と**、**子**、**者**、**あ**、**あ**、**つ**、**た**、**と**、**い**、**ふ**、**と**、**い**



別部待望。明待望。をいりお首。三抄録し  
 り。この昔漢書白と題。の七言短古。客  
 昔漢書。得者。沈。柳絲拂地。紫衣飛。客子。結。定。已  
 三月。春風。初。拂。越。羅。衣。羅。衣。不。透。試。者。江。曲。祀  
 外。考。終。對。還。境。者。心。西。鶴。界。兩。相。催。暫。見  
 天涯。碧。草。綠。春。草。年。年。伴。客。程。每。身。向。日。又  
 孤。紅。林。園。回。首。春。雲。隔。江。上。春。風。空。綠。情。  
 の。子。陳。厚。可。構。想。し。を。變。化。し。婉  
 轉。凄。脆。の。致。い。つ。か。か。愛。徇。あ。ん。ま。を。愛。す。の  
 作。か。り。て。も。子。の。詩。才。の。隆。お。の。極。一。不。で。悲。像

し。且。後。世。の。其。後

た。小。の。

の。土。俗。を。感。化。した

昔。別部待望の祀。を。し。と。云。の。後。小。は。新  
 々の。家。に。沿。堂。園。・。律。音。閑。あり。立。亭。池。佳。勝  
 妙。の。音。律。在。能。し。自。ら。紅。牙。を。按。し。曲。の  
 度。す。今。校。際。多。く。な。摩。伎。を。書。す。は。その。者  
 風。乃。し。と。ある。神。の。原。曲。に。熟。り。て。待。望。の  
 嗜。好。を。持。柄。と。す。有。り。こ。の。か。合。の。こ。の。を。有。ん  
 一。こ。知。ら。ず。傳。奇。に。入。る。也。體。有。り。も。昔。彩。記  
 昔。彩。記。義。乳。記。風。教。編。の。四。理。に。歸。か。か  
 る。中。昔。彩。記。の。外。汲。古。閣。刊。行。の。古。十。種。曲

彼

三

の中にある(2) 廻り傳はつて居る(3) の他の  
先程は書く(4) 煙路(5) 今考へた(6) こと(7) 出木(8) 友  
音(9) 妙(10) 化(11) 伝(12) 島(13) 竊(14) 遠(15) の(16) 青(17) 影(18) 淡(19) 田(20) の(21) 本(22) 子(23)  
と(24) 今(25) 南(26) 曲(27) の(28) 作(29) 接(30) (31) お(32) め(33) ん(34) 影(35) 多(36) 少(37)  
細(38) エ(39) 施(40) 今(41) 面(42) を(43) 展(44) 開(45) し(46) て(47) の(48) こ(49) の(50) め(51) か(52) 中(53) へ  
心(54) 持(55) たる(56) 張(57) 而(58) 助(59) 精(60) 想(61) は(62) 子(63) 傳(64) ん(65) 結(66) ぶ  
踏(67) 踏(68) 踏(69) つ(70) ま(71) り(72) 今(73) 采(74) 天(75) 女(76) 舞(77) (78) 樂(79) 曲(80) の(81) 中(82) に  
籠(83) り(84) 居(85) る(86) 女(87) 子(88) 江(89) の(90) 心(91) 腔(92) で(93) 再(94) 會(95) し(96) たい(97) とい  
ふ(98) こと(99) は(100) あり(101) も(102) 無(103) く(104) あり(105) たい(106) こと(107) だ(108) とい(109) う(110)

技

加々見

白采天(1) 早(2) 采(3) 天(4) の(5) 女(6) と(7) 出(8) る(9) と(10) 風(11) 香(12) 悲(13) を(14) 懐(15) び  
世(16) 成(17) る(18) の(19) 事(20) の(21) 表(22) 出(23) づ(24) る(25) 風(26) 香(27) の(28) 楽(29) 曲(30) 一(31) く  
幸(32) へ(33) 小(34) 窓(35) 舞(36) 臺(37) の(38) 二(39) 侍(40) 女(41) が(42) 片(43) と(44) 玉(45) を(46) 舞(47) の  
こ(48) の(49) 方(50) へ(51) 刺(52) 夢(53) の(54) 鳥(55) 籠(56) 元(57) 微(58) 之(59) つ(60) 特(61) の(62) 之(63) が(64) あり(65)  
子(66) の(67) 内(68) 刺(69) 夢(70) は(71) 徒(72) 徒(73) に(74) 又(75) つ(76) て(77) 大(78) 分(79) 立(80) 身(81) した(82)  
す(83) る(84) と(85) 元(86) 微(87) 之(88) 一(89) 日(90) 来(91) り(92) 訪(93) り(94) 合(95) 時(96) の(97) 國(98) 事(99)  
日(100) 人(101) 非(102) ざる(103) 道(104) 一(105) 之(106) 人(107) を(108) 救(109) 護(110) する(111) め(112) だ(113)  
我(114) の(115) 身(116) 命(117) は(118) 後(119) へ(120) 上(121) して(122) 法(123) 臨(124) 高(125) 妓(126) の  
紅(127) 蓮(128) を(129) 愛(130) る(131) 施(132) する(133) 外(134) ある(135) 事(136) 無(137) き(138) と(139) 思(140) う(141)  
日(142) 采(143) 天(144) の(145) 女(146) と(147) 出(148) る(149) こと(150) は(151) 上(152) へ(153) 交(154) 渉(155) 備(156) えて(157) いる(158)

話

3

友

下(1) 新(2) 風(3) 集(4) 卷(5) 八(6) 頁(7) 末(8)

木

二(1) 三(2)

一(1) 二(2)

十(1) 廿(2) 松(3) 風(4) 集(5)

渴は

涯

この頃長女の教坊に装束地と子名はあり  
そ、かろそ 狂地悪と曹善才に字人正字  
の如手と梅でんし 古か 御女は久しく  
竹の周に住ちと欲せず 是より人を見付け  
生れと地とたるとる居るん、もくより聰明多

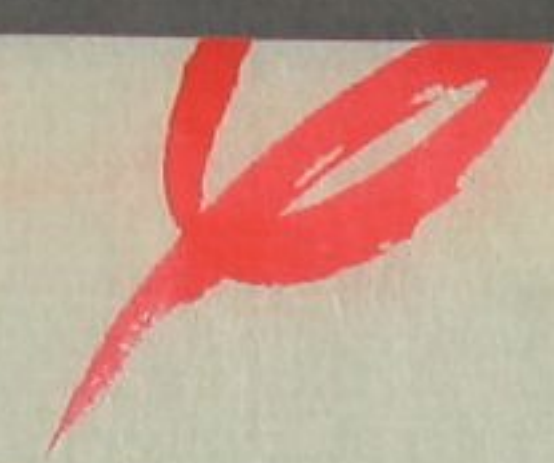
おれり女子である。

白楽平愈久 依に鹿也のし 越ん上只新  
とて 舞臺十重の二重 山字と催し 道  
事大なる御事 白楽平は書移り留め  
の 見るとし 行の無異と祈る 亦かたけの

白楽平は  
一節の青  
彩り行  
の 白

白楽天 元徴之 ときりん 越ん上只新

鹿もとし 天子執ら之し 爾ひ 今何物貴の撫  
安と書少のあり 連符を言ふのあり ころ 院  
りか小いほるの 雨多士 洋ん 之 何ん 昔も 膝 款  
愛しとすし とり 久し 元白の二人 討策  
を 上ると 天子 二人 三嘉加 仙 控ひ かの 宮  
命 といふ人 二人 進士 ぬ 予と 賜り 白告 易ん け  
律院 左 拾遺 之 授 中 書 余 人 之 妻 何し ぬ  
元 棟 には 秘書 省 秘書 郎 之 授 けり 小  
に 二人 僅 人 下 天 恩 之 御 常 威 也



三呼しと出まよ。

判りぬるは木。

元白ニ友の仕と守り大

いふを度々の意を表すゆへに酒肴を因縁

と書きて身交れ考むむとて申んれ方了二文

来りて一めん大い喜んでいふおれはあつた

は者せしとて一故也びろれんは若衆奴

とりの見名はあつた、こゝん匠道の御手

ひあつた、不考身ぬえ是やうではなぬ

いぬかかして其花に経ると、竹の免も角水

庫は言詞を作りし文書之長根取を作りし

白楽天とめん常代知名の詞人であるが

典ぬもあつた、是に敬待しは意匠

道に弾指して写す、是の時、楽天、世奴の

二人の死とて、是の意あるか、見え、

昔は微子の二人、たに氣を和めし、

此に在るし、林等、何日、

抑つて鳥多、満つ、来ると世と、

楽天は、終に、世奴の、留まり、

抑も、二人、勸告の、始り、

こゝに、撰書、あつた、その人、は、

楽天と、私、い、

一以<sup>レ</sup>勝<sup>ル</sup>者を空閑<sup>ニ</sup>送<sup>ラ</sup>えりし<sup>ニ</sup>て  
 こ<sup>ノ</sup>居る所を<sup>レ</sup>於<sup>テ</sup>如何<sup>ニ</sup>せん<sup>ト</sup>も  
 侍官ヤ一<sup>ニ</sup>報<sup>セ</sup>じ二<sup>ノ</sup>の喜<sup>ビ</sup>た<sup>ト</sup>も  
 こ<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>位<sup>上</sup>の<sup>レ</sup>多<sup>ク</sup>手<sup>ハ</sup>入<sup>リ</sup>し<sup>ニ</sup>て  
 克<sup>ク</sup>融<sup>ク</sup>、<sup>レ</sup>朝政<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>憤<sup>ル</sup>處<sup>ニ</sup>事<sup>ハ</sup>多<sup>ク</sup>  
 の<sup>レ</sup>節<sup>ノ</sup>致<sup>シ</sup>使<sup>レ</sup>王<sup>ヲ</sup>延<sup>キ</sup>遠<sup>シ</sup>令<sup>テ</sup>之<sup>レ</sup>  
 入<sup>リ</sup>て<sup>レ</sup>優<sup>ク</sup>接<sup>シ</sup>と<sup>ル</sup>邊<sup>ニ</sup>一<sup>カ</sup>ら<sup>シ</sup>と<sup>ル</sup>る<sup>ト</sup>  
 之<sup>レ</sup>の<sup>レ</sup>情<sup>ノ</sup>は<sup>レ</sup>愈<sup>々</sup>々<sup>ト</sup>なり<sup>也</sup>  
 御<sup>中</sup>侍<sup>給</sup>史<sup>より</sup>出<sup>し</sup>に<sup>レ</sup>州<sup>刑</sup>史  
 とい<sup>ハ</sup>り<sup>何</sup>の<sup>レ</sup>氣<sup>ヲ</sup>たり<sup>出</sup>せ<sup>り</sup>と<sup>ス</sup>る<sup>也</sup>  
 元<sup>白</sup>の

十一廿 松屋製

二人<sup>ニ</sup>小<sup>さ</sup>き<sup>部</sup>外<sup>ニ</sup>送<sup>ラ</sup>え<sup>り</sup>然<sup>レ</sup>動<sup>シ</sup>に<sup>レ</sup>別<sup>に</sup>送<sup>ラ</sup>れ<sup>り</sup>  
 の<sup>レ</sup>時<sup>ハ</sup>留<sup>ル</sup>の<sup>レ</sup>大<sup>に</sup>為<sup>リ</sup>の<sup>レ</sup>長<sup>子</sup>の<sup>レ</sup>過<sup>ス</sup>り<sup>と</sup>も<sup>ハ</sup>知<sup>ル</sup>り<sup>也</sup>  
 王子<sup>侍</sup>の<sup>レ</sup>救<sup>ヲ</sup>三<sup>下</sup>し<sup>ニ</sup>由<sup>官</sup>の<sup>レ</sup>吐<sup>實</sup>成<sup>確</sup>以<sup>命</sup>  
 神<sup>策</sup>諸<sup>軍</sup>を<sup>レ</sup>統<sup>制</sup>し<sup>て</sup>三<sup>三</sup>の<sup>レ</sup>征<sup>伐</sup>せ<sup>し</sup>め<sup>た</sup>處<sup>也</sup>  
 が<sup>レ</sup>一<sup>一</sup>戦<sup>ん</sup>に<sup>レ</sup>朱<sup>支</sup>既<sup>ノ</sup>の<sup>レ</sup>あ<sup>り</sup>敗<sup>れ</sup>て<sup>レ</sup>賊<sup>軍</sup>集<sup>ル</sup>  
 勝<sup>た</sup>ぬ<sup>ま</sup>し<sup>て</sup>長<sup>子</sup>の<sup>レ</sup>方<sup>ヲ</sup>推<sup>シ</sup>て<sup>レ</sup>身<sup>ヲ</sup>せ<sup>し</sup>め<sup>り</sup>  
 裴<sup>興</sup>奴<sup>お</sup>い<sup>し</sup>ん<sup>白</sup>梁<sup>天</sup>と<sup>レ</sup>絶<sup>服</sup>を<sup>レ</sup>結<sup>び</sup>し<sup>た</sup>  
 日<sup>夕</sup>思<sup>吉</sup>事<sup>あり</sup>と<sup>レ</sup>止<sup>ま</sup>り<sup>し</sup>其<sup>家</sup>に<sup>レ</sup>  
 在<sup>る</sup>青<sup>衫</sup>を<sup>レ</sup>持<sup>つ</sup>て<sup>レ</sup>こ<sup>ノ</sup>思<sup>ひ</sup>出<sup>す</sup>  
 一<sup>錠</sup>の<sup>レ</sup>銀<sup>子</sup>を<sup>レ</sup>以<sup>て</sup>こ<sup>ノ</sup>青<sup>衫</sup>を<sup>レ</sup>借<sup>ひ</sup>た<sup>ん</sup>





裝束好女子は白楽天の家におのりて  
~~月夜花鳥の~~ 樊素の意をか  
 知つたが、樊素の意のついでに、  
 一日その娘の白夫人は、  
 女をば、この着衣を贈るに、  
 例の楽天の着青衫を、  
 乙女は、  
 係を、  
 思ふ、  
 若況に、

雨の銀子、  
 以て、  
 い、  
 が、  
 像、  
 り、  
 こ、  
 は、  
 片、  
 事、

子



目こん  
困るから

ふらふらからうとふらふらと  
ついでに同様の念を借した  
とらふに仕立てるうら  
子やうとらふのついでに  
白楽天のやうに江州のま  
遊園の楽人にて七が  
候に遊園の樂人にて七が  
白樂天のやうに見し  
まのとも無双は、  
松屋製

10

ついでに同様の念を借した  
とらふに仕立てるうら  
子やうとらふのついでに  
白樂天のやうに見し  
まのとも無双は、  
松屋製

自の代  
思

劉一印は... 大い... 者母... 連年... 今ほ... 自... 決... は自... 劉一印...  
劉一印は... 大い... 者母... 連年... 今ほ... 自... 決... は自... 劉一印...  
劉一印は... 大い... 者母... 連年... 今ほ... 自... 決... は自... 劉一印...

南の方に

自の代

舟... 契... 見... 三... 天... 自... 舟... 契... 見... 三... 天... 自...  
舟... 契... 見... 三... 天... 自... 舟... 契... 見... 三... 天... 自...  
舟... 契... 見... 三... 天... 自... 舟... 契... 見... 三... 天... 自...

終ら合ひいふかあ日帯歸一こ柴水るといふか  
 元徴王は三を待し帰るの自限も、あとい切  
 也一と居るが明朝再心縦之解りて生女  
 也、おはちるぬ、素庭いかに所用も片付く  
 有、二兄孫はるは再ひ来り訪げ下よ、その時  
 舟中の様は月を貴し一と夕の興を認んし  
 とふと二人仄を流し、一かば今如酒香を  
 用意し、再び綿帯おしやるといふ、  
 とにたす。

劉由一節をいん装束奴を要そより二個

見ると興好は、いれ劉一節の從、何皮つか  
 経ると徒然見つたが仕度あつた相見も  
 交り違り給ふ、このころは、者身自ら見え  
 二式と重なる御從を、やるといふ装束者母は、下  
 あり指袋、その全とあり合はぬから、保の者  
 け、おし、と物り、銀、青衫を、還すし、白紫天  
 元徴之、張を、あし、江南の、田、梅し、を、歌  
 江州、と、道、を、と、劉、由、馬、司、馬、白、紫、天、と、い  
 三、六、力、あ、つ、た、い、と、迎、へ、て、お、別、後、の、事、を、

劉由馬司馬白紫天と  
 迎へてお別後の事を

とうすゝおの奥奴ゆ、さすおの意いと思おやうのたえ  
 ころ、~~後~~此夜言やう次ふんたるんあ  
 らうとて、~~即~~即ちい喜び、いとう江邊の酒  
 枕に~~ぬ~~びん行く張奥奴は~~後~~が~~出~~て往き、~~その~~  
 見、月夜に風清ま江上の秋色に替へ、その  
 身の性命を~~懸~~し、~~目~~目眩さそありあ、~~その~~  
 弾と始ぬ、~~その~~この時白米おは~~割~~割夢ほ~~その~~  
 い元徽、~~三~~の舟に居て酒を飲けり、~~其~~其時  
 岸を~~さ~~り、~~何~~何人の舟か、~~尋~~尋ねて来つとて  
 左にお客つて、~~字~~字果の茶客の舟と、~~其~~其天

三流今、~~も~~其舟に江州の埤歌に喜せ、~~居~~居の  
 この間、~~其~~其は、~~その~~其志に多かき、~~決~~決して~~割~~割即  
 三枕席を~~考~~考へ、~~た~~たころが~~ない~~ないか、~~割~~割即は~~大~~大の  
 石橋でいらく言つと、~~欺~~欺すやうに~~其~~其め、~~是~~是眼の  
 意の~~往~~往はせやうと、~~あ~~あ其は~~信~~信つて~~三~~三橋  
 あり、~~果~~果は~~つ~~つんと~~九~~九で~~相~~相争は~~し~~し、~~い~~いす  
 と、~~小~~小所は~~割~~割一~~色~~色に~~説~~説く、~~その~~その~~後~~後~~事~~事、~~人~~人~~許~~許り  
 かつ、~~こ~~こら付~~手~~手~~舞~~舞ふ~~か~~か、~~あ~~あ、~~目~~目~~其~~其の~~意~~意、~~幸~~幸ん  
 江邊の~~木~~木枝が~~あ~~あ、~~あ~~あ、~~と~~と、~~車~~車~~人~~人で、~~後~~後~~者~~者  
 へも上~~げ~~げ十日、~~か~~か半日~~位~~位、~~帰~~帰らぬが~~あ~~あから、

奴  
たのむるよりかゝるは長途を弾がらものには紫雲  
如くあらうとて急いで三途へ参りしめ樂天  
典奴こゝろ料りずも再會せしむる浪  
の咽のはかりし時樂天は仙の青衫を脱ぎ  
の空が雨を降し居のめん盡く濡れし侍衆  
つゝる時割一即侍たに酔つて酒独り歸つて  
来たが正に踏み外し河の中にあちこち  
と仕舞つるを典奴い何こゝは物事の幸に  
あつてそこで樂天は轉て用意し典奴を執  
て元徴之に別小て其家へ歸すこと禁書  
十廿

山帝方の喜んで之を遊へその御完衆  
を呼ぶる  
子の御期元徴之は別夢侍ととらん来り訪  
ふに御書を述べてかかて酒宴を催さるる時  
も郭進の強書が到る者も樂天は僕人  
御書は御書等の大義類を記して直陳する  
は毒瘴の忠貞一雨も在指道は作し今に御  
侍もさる侍の元因るは州の請書し忠  
謹す敵終ん事あつるに思ひすこと侍人臣

閑居の詩

一と禮部侍郎兼翰林學士を以て非礼  
 禮部を賜ひ此字を象徴と解ゆ  
 非礼の字は皆々喜ばるこゝに  
 學士を擡げしを譽めり向ひて  
 二非を賜けりしもの青衫  
 思ひか他日又之を著る時  
 つて還けしといふ又前白  
 といふ等く相共に提擡  
 い事さうてははぢらちといふ  
 古園園

十ノ廿 松屋製

一の侍者たるを二十勅で青衫誤り此  
 一と古字の向面が長閑なりたる  
 無き物も情を来るるものと思はるる白案  
 夫が紫煙好に遇ふは乃七勅也  
 家所の好事も起り上る強臨の  
 が見え居る  
 と相似た處もある  
 の上疏をせりしもの  
 い序ありては州の満ちたるもの  
 深り居る大いむらゝる

のらん **紫お母が** **難** **遊** **レ** **託**  
~~と出り~~ ~~とりの~~ ~~この~~ ~~関係~~ ~~が~~ ~~切~~ ~~り~~ ~~ある~~ ~~の~~ ~~事~~

**かえ**

~~所の~~ ~~青~~ ~~衫~~ ~~が~~ ~~掃~~  
~~お~~ ~~し~~ ~~る~~ ~~針~~ ~~跡~~ ~~を~~ ~~さ~~ ~~う~~ ~~け~~ ~~し~~ ~~り~~ ~~ん~~ ~~楽~~ ~~天~~ ~~が~~ ~~五~~ ~~三~~ ~~者~~

~~と~~ ~~起~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~り~~ ~~由~~ ~~次~~ ~~ん~~ ~~三~~ ~~三~~ ~~典~~ ~~二~~ ~~酒~~ ~~の~~ ~~樽~~ ~~の~~ ~~次~~  
し **紫** **典** **奴** **が** **五** **三** **者** **一**

**決**

~~難~~ ~~の~~ ~~間~~ ~~に~~ ~~迄~~ ~~さ~~ ~~り~~ ~~難~~ ~~さ~~ ~~る~~ ~~掛~~ ~~の~~ ~~一~~ ~~往~~ ~~と~~ ~~の~~  
は ~~松~~ ~~の~~ ~~雨~~ ~~白~~ ~~く~~ ~~さ~~ ~~り~~ ~~か~~ ~~ん~~ ~~細~~ ~~心~~ ~~の~~ ~~機~~ ~~は~~ ~~あ~~ ~~ず~~ ~~ま~~ ~~る~~ ~~と~~ ~~ん~~

か **紫** **典** **奴** **が** **偽** **と** **し** **し** **し** **紫** **典** **小** **帝** **の** **留** **守**  
せ **白** **式** **の** **結** **成** **り** **言** **の** **官** **丸** **止** **り** **の**

**かえ**

~~と~~ ~~り~~ ~~の~~ ~~は~~ ~~あ~~ ~~ず~~ ~~託~~ ~~合~~ ~~の~~ ~~美~~ ~~お~~ ~~ぞ~~ ~~る~~ ~~か~~ **丸** **止** **り** **の**

~~の~~ ~~め~~ ~~を~~ ~~な~~ ~~が~~ ~~張~~ ~~り~~ ~~ま~~ ~~る~~ ~~あ~~ ~~ら~~ ~~仕~~ ~~立~~ ~~の~~ ~~あ~~ ~~い~~ ~~は~~ ~~わ~~ ~~り~~  
向 **の** **青** **衫** **が** **撫** **育** **少** **雅** **の** **牛** **ん** **帰** **し** **白** **崇** **天** **が**

~~二~~ ~~雅~~ ~~三~~ ~~江~~ ~~の~~ ~~道~~ ~~一~~ ~~ん~~ ~~因~~ ~~る~~ ~~典~~ ~~奴~~ ~~の~~ ~~事~~ ~~を~~ ~~知~~ ~~る~~ ~~と~~ ~~も~~ **新**  
へ **何** **と** **し** **て** **青** **衫** **の** **掃** **し** **ま** **す** **と** **の** **事** **を** **言** **ふ**

~~お~~ ~~が~~ ~~付~~ ~~け~~ ~~た~~ ~~の~~ ~~事~~ ~~の~~ **紫** **典** **奴** **が** **割** **一** **印** **に** **従** **つ** **て**  
~~の~~ ~~は~~ ~~老~~ ~~母~~ ~~の~~ ~~強~~ ~~弱~~ ~~を~~ ~~青~~ ~~衫~~ ~~決~~ ~~て~~ ~~は~~ **紫** **典** **の** **左** **決** **て**

~~老~~ ~~母~~ ~~の~~ ~~死~~ ~~を~~ ~~使~~ ~~り~~ ~~て~~ ~~思~~ ~~ひ~~ ~~切~~ ~~り~~ ~~た~~ ~~ら~~ ~~ず~~ ~~に~~ ~~三~~ ~~三~~ ~~は~~  
~~唯~~ ~~が~~ ~~老~~ ~~母~~ ~~の~~ ~~強~~ ~~弱~~ ~~を~~ ~~迫~~ ~~り~~ ~~し~~ ~~し~~ ~~典~~ ~~奴~~ ~~は~~ **丸** **止** **り** **の**

**決** **一** **印** **に** **従** **つ** **て** **是** **れ** **を** **お** **ぞ** **る**

~~と~~ ~~割~~ ~~一~~ ~~印~~ ~~に~~ ~~従~~ ~~つ~~ ~~て~~ ~~は~~ ~~あ~~ ~~ら~~ ~~ず~~ ~~に~~ ~~三~~ ~~三~~ ~~は~~ **丸** **止** **り** **の**





時殊の  
三層房

18

くらぬ  
 昔彩記はからあまはなまであるん何故由は杖  
 の序は彩記はあまのまはなでなにか江懸亭は  
 月舟人の撰は昔彩記の院本あり今は色道  
 ともし雅道を信じていふ所蔵園はつとまらん昔  
 彩記院本あり昔山もむ此文い解らざるはこれ乃  
 ち江州送客の時彩記は仍てそ司馬の婦は前  
 仙と成す命意は勲詞有る事辨らるしとひ  
 臨えてこの原本たる昔彩記はあまのまの杯  
 御の怪あまのまの杯はともいふは彩記の序は

十ノ廿松屋製

相考の理由があるん素来雅劇は元代の新曲  
 として後述三小三撰制をせしめあまも明  
 入るは南曲が主として行々小仍て三篇  
 の雅劇は院本として流行してその  
 昔彩記は矢張りその一であるは三小三撰序成  
 園ともいふは昔彩記を觀たことあらうしその  
 存在を知らぬ者やあつかうすは  
 ひより真自ら近き昔彩記の序を考けし著言を  
 為したるものあらう

月舟人と考ふ三小三撰の昔彩記は院本は行

あまのまの

の限りたる

日本つきのあつはらり、  
 ありとほめて無残りも、  
 なるものなる。そこじ、  
 けりま。事喜みの、  
 けみ七のあ即ち、  
 才力は、  
 事成功—なるもの。

十一廿 松屋製

白樂天 唐物傳

あかし 元和十五年の秋、  
 江戸の原より、  
 入江の原より、  
 舟に越の浪抑へかたし、  
 行く程に空を、  
 さみづけて、  
 りと思ひ、  
 ありとほめて、  
 事成功—なるもの。

程のり。不<sup>ま</sup>まらん怪<sup>し</sup>ま心抑<sup>へ</sup>かたしあま  
武<sup>ま</sup>すり外<sup>に</sup>誰<sup>か</sup>た<sup>は</sup>又<sup>も</sup>た<sup>き</sup>りあ<sup>る</sup>ま<sup>ま</sup>  
覚<sup>え</sup>た<sup>ら</sup>ば<sup>は</sup>皆<sup>を</sup>し<sup>ん</sup>ん<sup>の</sup>誰<sup>の</sup>た<sup>に</sup>か<sup>ら</sup>も<sup>も</sup>  
お<sup>の</sup>周<sup>らん</sup>我<sup>は</sup>不<sup>高</sup>人<sup>の</sup>妻<sup>たり</sup>あ<sup>か</sup>し<sup>お</sup>あ<sup>ひ</sup>  
十三<sup>に</sup>こ<sup>の</sup>理<sup>理</sup>也<sup>を</sup>習<sup>ひ</sup>侍<sup>た</sup>る<sup>こ</sup>と<sup>も</sup>世<sup>ん</sup>ま<sup>あ</sup>ぐ  
か<sup>ら</sup>り<sup>ま</sup>こ<sup>の</sup>み<sup>か</sup>じ<sup>の</sup>の<sup>結</sup>前<sup>に</sup>こ<sup>の</sup>一<sup>の</sup>高<sup>調</sup>や<sup>り</sup>に  
百<sup>の</sup>の<sup>結</sup>引<sup>出</sup>物<sup>を</sup>賜<sup>ひ</sup>こ<sup>の</sup>又<sup>も</sup>井<sup>め</sup>か<sup>ら</sup>七<sup>有</sup>  
リ<sup>か</sup>た<sup>く</sup>珍<sup>し</sup>く<sup>と</sup>種<sup>々</sup>り<sup>し</sup>あ<sup>は</sup>見<sup>ず</sup>く<sup>ま</sup>く  
人<sup>さ</sup>し<sup>か</sup>ら<sup>思</sup>ふ<sup>思</sup>ふ<sup>け</sup>心<sup>を</sup>盡<sup>さ</sup>り<sup>ま</sup>す<sup>一</sup>泉<sup>一</sup>  
い<sup>も</sup>新<sup>造</sup>也<sup>を</sup>枯<sup>着</sup>れ<sup>て</sup>井<sup>め</sup>か<sup>ら</sup>者<sup>り</sup>し

十一廿松屋

2

に<sup>も</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>不</sup>意<sup>一</sup>に<sup>か</sup>た<sup>せ</sup>の<sup>経</sup>る<sup>力</sup>失<sup>せ</sup>た<sup>と</sup>  
廿<sup>あ</sup>方<sup>せ</sup>ん<sup>か</sup>り<sup>に</sup>こ<sup>の</sup>高<sup>人</sup>の<sup>契</sup>を<sup>結</sup>び<sup>て</sup>  
こ<sup>の</sup>周<sup>の</sup>感<sup>を</sup>引<sup>り</sup>こ<sup>の</sup>高<sup>人</sup>の<sup>情</sup>を<sup>引</sup>別<sup>れ</sup>  
を<sup>惜</sup>む<sup>こ</sup>と<sup>い</sup>は<sup>浅</sup>し<sup>一</sup>少<sup>く</sup>を<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>も<sup>せ</sup>  
あ<sup>は</sup>出<sup>ん</sup>て<sup>往</sup>ぬ<sup>る</sup>後<sup>立</sup>ち<sup>帰</sup>り<sup>ほ</sup>ら<sup>し</sup>  
帰<sup>り</sup>程<sup>あ</sup>ら<sup>る</sup>に<sup>は</sup>伏<sup>み</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>待</sup>た<sup>れ</sup>し<sup>も</sup>  
宗<sup>の</sup>か<sup>ら</sup>こ<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>に<sup>は</sup>准<sup>た</sup>定<sup>し</sup>を<sup>解</sup>を<sup>守</sup>り  
つ<sup>つ</sup>秋<sup>の</sup>月<sup>の</sup>あ<sup>ま</sup>い<sup>き</sup>を<sup>み</sup>見<sup>こ</sup>り<sup>り</sup>  
白<sup>雲</sup>天<sup>の</sup>小<sup>徑</sup>の<sup>聲</sup>を<sup>聞</sup>き<sup>て</sup>慈<sup>深</sup>し<sup>一</sup>  
又<sup>も</sup>種<sup>々</sup>り<sup>の</sup>ゆ<sup>め</sup>ら<sup>に</sup>あ<sup>ら</sup>る<sup>ゆ</sup>た<sup>る</sup>心<sup>地</sup>

よれも君も禁の同り如くや必す其禁の  
書きかぬことと思ひ知る我らも一  
よりんかかるとか小都を離れこの地に沈め  
又病の延びしに立ち居ることたやすか  
らぬいと物心細ま折ん浪風より外に立ち  
まじり人もたまはす井かこは如雲の上葉  
をほの巻をこもこちの舟よの舟か上月の  
井ゆりこえこいまた葉の聲をゆかか今  
宵の君の思遠の調をすらんほん  
天の葉をかかりかかぬ  
不とすらん人か

3.

涙を流せりこの中にも白葉天一人袂をぬ  
と見えたり  
らりり入にありしことと盡すは袖の陰  
のあいらすいかな  
この人は世の中の人心の皆濁るを愛し  
し中思ひたむ一人すまひて常は起に  
跡をせらるるあめがらりあり

唐園の

(河東節)

一葉輕く 蘆問も 合らる 船の内 酒を 飲  
 せ 白居易は 月ふうそ かく 天の 石の 裏の  
 朝あすの 遠く 4里よちの外も 隈すこ  
 水の 深き 江や 舟の 霧の 危あやな 間  
 づの 下 柳も かる 漢まの 火の 見え  
 知しり 若わかの 内 浦も 海うみの 社やしろの 火の けり  
 かん ても し 琵琶の 音か かな ほと つか

一らん かん 四よ倍 一いち等 すや 味と せん 忽と  
 俚わづら子 ます し じ かん 子 ぬの 用の あま 山 舟  
 か たる 風い 音 遠き 拉はの む 解と こと かり 居  
 字あらも せ 糸 姑むすめの 哀あはれの 身みの 知 小 袖 涙  
 の たる ほへ ず たる や 所ところの 浪なみの上 泣いた  
 少ちる 人ひとも せ 酔よひ 狂くるき 色いろの 中なか び 音ねも せ ず  
 解と せ 舟ふねの 内うち 舟ふね 上うへも ず 明あけの 日ひ さ や  
 月つきの 色いろも ん じ 松まつの 枝えだの 花はなも ち  
 舟ふねの 袖そでに 雨あめか かる 時ときん 舟ふね 天あま こと 葉は

やあ <sup>た</sup>和<sup>ん</sup>が <sup>い</sup>か <sup>で</sup>あ <sup>ら</sup>波 <sup>い</sup>浮 <sup>ま</sup>度 <sup>の</sup>船 <sup>ち</sup>せ <sup>し</sup>  
め <sup>た</sup>ち <sup>る</sup> <sup>正</sup>比 <sup>呂</sup>の <sup>い</sup>と <sup>と</sup> <sup>ち</sup>辰 <sup>お</sup>ぼ <sup>つ</sup>か <sup>や</sup>し <sup>や</sup>  
さ <sup>る</sup> <sup>い</sup> <sup>し</sup> <sup>も</sup> <sup>後</sup>身 <sup>は</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>何</sup> <sup>ち</sup> <sup>る</sup> <sup>御</sup>事 <sup>を</sup> <sup>つ</sup> <sup>か</sup> <sup>や</sup> <sup>し</sup> <sup>や</sup>  
の <sup>列</sup> <sup>子</sup> <sup>磯</sup> <sup>の</sup> <sup>玉</sup> <sup>れ</sup> <sup>浮</sup> <sup>の</sup> <sup>み</sup> <sup>か</sup> <sup>は</sup> <sup>お</sup> <sup>つ</sup> <sup>ま</sup> <sup>言</sup> <sup>の</sup> <sup>ま</sup> <sup>手</sup>  
も <sup>白</sup> <sup>糸</sup> <sup>の</sup> <sup>正</sup> <sup>比</sup> <sup>呂</sup> <sup>を</sup> <sup>地</sup> <sup>ま</sup> <sup>て</sup> <sup>面</sup> <sup>は</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>ら</sup> <sup>甘</sup> <sup>か</sup>  
は <sup>隔</sup> <sup>せ</sup> <sup>し</sup> <sup>都</sup> <sup>内</sup> <sup>を</sup> <sup>は</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>め</sup> <sup>ん</sup> <sup>張</sup> <sup>の</sup> <sup>每</sup> <sup>本</sup> <sup>櫓</sup> <sup>や</sup>  
本 <sup>の</sup> <sup>間</sup> <sup>の</sup> <sup>花</sup> <sup>の</sup> <sup>露</sup> <sup>の</sup> <sup>重</sup> <sup>ら</sup> <sup>お</sup> <sup>つ</sup> <sup>誰</sup> <sup>が</sup> <sup>身</sup> <sup>を</sup>  
其 <sup>伊</sup> <sup>呂</sup> <sup>の</sup> <sup>改</sup> <sup>め</sup> <sup>し</sup> <sup>や</sup> <sup>増</sup> <sup>ち</sup> <sup>ず</sup> <sup>業</sup> <sup>夫</sup> <sup>の</sup>  
と <sup>い</sup> <sup>ち</sup> <sup>や</sup> <sup>誰</sup> <sup>か</sup> <sup>比</sup> <sup>目</sup> <sup>の</sup> <sup>浪</sup> <sup>枕</sup> <sup>あ</sup> <sup>は</sup> <sup>い</sup>  
ぬ <sup>の</sup> <sup>夢</sup> <sup>を</sup> <sup>思</sup> <sup>は</sup> <sup>せ</sup> <sup>や</sup> <sup>ら</sup> <sup>お</sup> <sup>ち</sup> <sup>さ</sup> <sup>よ</sup> <sup>ら</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup> <sup>い</sup>

F

け <sup>小</sup> <sup>舟</sup> <sup>し</sup> <sup>こ</sup> <sup>も</sup> <sup>せ</sup> <sup>の</sup> <sup>途</sup> <sup>ん</sup> <sup>果</sup> <sup>つ</sup> <sup>て</sup> <sup>あ</sup> <sup>ら</sup> <sup>わ</sup> <sup>の</sup> <sup>花</sup>  
も <sup>あ</sup> <sup>ゆ</sup> <sup>せ</sup> <sup>の</sup> <sup>身</sup> <sup>を</sup> <sup>あ</sup> <sup>し</sup> <sup>づ</sup> <sup>け</sup> <sup>も</sup> <sup>流</sup> <sup>石</sup> <sup>羽</sup> <sup>束</sup> <sup>師</sup>  
の <sup>も</sup> <sup>り</sup> <sup>を</sup> <sup>浮</sup> <sup>世</sup> <sup>の</sup> <sup>定</sup> <sup>め</sup> <sup>を</sup> <sup>ま</sup> <sup>ら</sup> <sup>い</sup> <sup>る</sup> <sup>嘗</sup> <sup>た</sup> <sup>の</sup> <sup>り</sup>  
祝 <sup>が</sup> <sup>あ</sup> <sup>ま</sup> <sup>の</sup> <sup>東</sup> <sup>へ</sup> <sup>何</sup> <sup>行</sup> <sup>の</sup> <sup>流</sup> <sup>の</sup> <sup>末</sup> <sup>と</sup> <sup>御</sup> <sup>覽</sup>  
七 <sup>よ</sup> <sup>の</sup> <sup>舟</sup> <sup>を</sup> <sup>い</sup> <sup>ち</sup> <sup>め</sup> <sup>る</sup> <sup>何</sup> <sup>行</sup> <sup>の</sup> <sup>流</sup> <sup>の</sup> <sup>末</sup> <sup>と</sup> <sup>御</sup> <sup>覧</sup>  
ち <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>ち</sup> <sup>や</sup> <sup>は</sup> <sup>あ</sup> <sup>ん</sup> <sup>陸</sup> <sup>お</sup> <sup>月</sup> <sup>の</sup> <sup>行</sup> <sup>衛</sup> <sup>を</sup> <sup>語</sup> <sup>り</sup>  
ま <sup>し</sup> <sup>ま</sup> <sup>せ</sup> <sup>し</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup> <sup>所</sup> <sup>を</sup> <sup>さ</sup> <sup>し</sup> <sup>る</sup> <sup>解</sup> <sup>の</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>つ</sup> <sup>ち</sup>  
手 <sup>あ</sup> <sup>は</sup> <sup>し</sup> <sup>て</sup> <sup>つ</sup> <sup>た</sup> <sup>花</sup> <sup>と</sup> <sup>い</sup> <sup>し</sup> <sup>昔</sup> <sup>の</sup> <sup>春</sup> <sup>は</sup> <sup>夢</sup> <sup>見</sup> <sup>ん</sup> <sup>や</sup>  
れ <sup>夫</sup> <sup>若</sup> <sup>松</sup> <sup>の</sup> <sup>中</sup> <sup>を</sup> <sup>し</sup> <sup>し</sup> <sup>手</sup> <sup>枕</sup> <sup>の</sup> <sup>ぬ</sup> <sup>ら</sup> <sup>い</sup>  
つ <sup>り</sup> <sup>し</sup> <sup>の</sup> <sup>大</sup> <sup>ま</sup> <sup>の</sup> <sup>舟</sup> <sup>の</sup> <sup>は</sup> <sup>こ</sup> <sup>ろ</sup> <sup>を</sup> <sup>思</sup> <sup>い</sup> <sup>ん</sup> <sup>疲</sup> <sup>れ</sup> <sup>て</sup>

68.

よや愛を身と巫山の雲の行儀と付はて  
 舞る宵々い誰か身うけのあねごとあこ  
 は信おけ方の信はくちもくるくしんは  
 及らぬん今年も過ぎつ又来る春もつれ  
 い教了安の夜もうぬつらひこ今も  
 日根引の待つ人も誰かぬ継らぶ  
 寄る邊も浪ん身と浮草の根も  
 絶えささそあゆまへ行く舟のしほにこが  
 ちくくおこん茶を台せくわうり茶  
 りりて世をやたさその人いさし新らぶて

花が黄流る水の影うまひあやの園の  
 の追風はかめりか神の音に匂の舞に舞  
 もよりのや里ゆけ片目うかつ空と涼き  
 山村雨あまの長柄をさあせあさ女  
 伽羅の居結りこぼるる露のつらんぬ  
 しめく乾すまの查やらぐ手か  
 びた心か紅の濃ん裾にちみ酒つま  
 待宵にいあけて廊のちつあきま  
 男のわたり秋宵らうんのまらまらぬ  
 の客ん下紐をとりしほの露涙つら

わかこしつふて出解の片帆せみ間のよき  
がたぐこと浦風の音つれををいそ山松の  
よをいし心いあたる音明のつれたる張の  
自身はひとり海の外い綱あんとたる音もほ  
琴の音ひびきいゆいゆあたるけの  
商人は利を重なりて別離を輕んが今業  
天の身の上も起をせんてはるいと  
る邊土の偏居くこ好御の枯のちるか  
しと懸竹の音も響も帰もたんと  
しと懸竹の音の響も響も帰もたんと  
しと懸竹の音の響も響も帰もたんと

は又かゝる憂き流あやにかつす花か袖  
静の春も仇夢とあやひらとてけんま  
しるに天涯流旅のこゝろ合あらし身のよ  
この歎息の三の海あんか海響んま  
紅の名張の袖の影色とらと糸かま  
あらしし啼啼もたあら雨つとあ楮より碑  
けのたつる玉水の音いせかると龍川や流心  
あつた堰まとのの響もあたる銀瓶の水  
並る一曲もよまんと夕陽のま  
別水の聲もよまんと遠かり行く船の跡月を



たわやの涙の袖へ涙らぬものこそ世ありけり

錯綜の妙言外に在り、……白式  
か混習行をうつ、……  
一本文と離れ、……  
の何事の筆力もや、……  
侍を主とて、……

大田南畝 偈百首

